
久遠のあなたに

伊倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久遠のあなたに

【Nコード】

N4045V

【作者名】

伊倉

【あらすじ】

長く生きられない運命を悟った天才魔道師久遠は自らを徹底的に改造することで永らえようとした。目覚めるまでの自分を護衛であり恋人である永に託す。眠り続ける恋人を抱え、久遠を狙うあらゆる組織から逃げ続ける永。二人の逃避行の果ては

この作品は某小説賞に応募してかすりもしなかったものを加筆修正したものです。

永の約束（前書き）

この作品は一度小説賞に応募して落選したものです。それを加筆修正しております

永の約束

少女はあるか無きかの呼吸を繰り返していた。薄い胸が微かに上下するからこそ、生きていると分かる。

灰色の髪に縁取られた顔は土気色で、痛々しいほどに病み衰え、骨と皮だけのようだ。それほど痩せ衰えていなければ愛らしい顔立ちだった。

本来なら、子供から大人へとかわる一番輝かしい年頃であるはずなのに、誰の目にも少女の命の火が消えようとしているのはあきらかだった。

この日が来ることは少女が生まれたときから分かっていた。極度の虚弱体質。

それを完治させることは魔法医学でさえ不可能だった。

最初は少女の両親の財力ゆえに、長じては少女自身の才能を惜しむが故に、延命の処置がとられていた。

だが、それもはや限界である。

与えられた魔法薬も今日という日が来るのを引き伸ばしていただけだった。

少女は日に日にやせ衰え、床に就きがちになり、やがて起き上がれなくなった。

少女の最後の希望で、恋人とともに静かな別館へ移り住み、最後のときを迎えようとしていた。

傍らに佇む若者も表情を抑えてはいるが、焦燥の色が濃い。

「約束は？」

青年が唐突に尋ねると、少女は灰色の瞳を開いた。

「必ず」

その体のどこにそれほどの気力が残っていたものか、少女は力強く言い切った。

「わたしは必ず帰ってくるわ。だから、永、わたしにあなたの命を

頂戴。わたしが目覚めたとき、永がないのは嫌だもの。そうしたら、わたしをあげるから」

「いいだろう。他のものは何もいらぬ。すべて捨ててみせよう。久遠のためなら、惜しむものなどない。」

青年 永 は躊躇なく申し入れを受け入れた。

少女 久遠くおんは微笑んだ。

そうして二人の契約は結ばれた。

再会だけを約束し、それに続く数多の苦難を必ずや乗り越えようという約束

永の約束（後書き）

この作品は私にしては珍しく「愛」を全面に押し出そうとしたものであります。恋愛物になっているでしょうか？

二人の暗殺者（前書き）

この作品には残酷な表現を含みます。

二人の暗殺者

大通りに面した道は賑やかで、行き交う人波は一地方都市としては多いだろう。

みやげ物を買いたい求めるものや、これからの旅の必需品をそろえるもの、商談をまとめる商人やら、祭りのごとき騒がしさである。

あるいは加羅伊からいの街は毎日が小さな祭りだと言えるかもしれない。流通の要所でもあり、王都や首都に比べれば見劣りはするものの、規模の割には活気のある街である。

魔道師ギルドやオードウグ教の支部、カトラス商会の支店も比較的大きく、使用料（オードウグ教ではお布施という名目）さえ払えば魔法動力が使用できるため、生活水準も比較的高い。

旅行者が多いため、その懐を当てにして露店や辻芸人が毎日営業する。

魔法生物を禁忌とするオードウグ教の辻説法の横で、幼児ほどの大きさの、愛らしい少女の姿をした魔法生物が小鳥のように囀っているのが、加羅伊の街の混沌たる有様を物語っている。

その背につけられた蝶のような翅からキラキラと魔法光を振りまきながら魔法生物が宙返りをする。人語を話さないところをみると、人型の魔法生物としてはさほど高価なものではない。だが、曲芸などを見せてはいるが、一介の芸人が魔法生物を所持しているはずがない。

おそらくはどこかの豪商か領主辺りが、余興で差し向け民衆を楽しませているのだろう。でなければ、魔道師ギルドかカトラス商会のデモンストラーションか。

どちらにしろ、敵に回すには厄介な相手ばかりだ。

さしものオードウグ教でも教区でもないところでは、無差別に魔法生物を迫害するわけにはいかない。

せいぜい、愛らしい姿と声で人々を魅了する魔法生物を、苦々し

げな目で見るくらいだろう。

笑いさざめく人の中、ひときわ背の高い青年がいた。

腰まで届く栗色の髪と、傾城の美女もかくやという美貌のため、女のようにも見えるが、体型を隠すゆつたりとした衣服に包まれているのは男の体である。

衆目を集めても不思議ではないが、どこか夢を見ているような表情をし、誰かにささやくように独り言を繰り返す様子に、人々はあえて目をそらす。

青年は辺りのことなどかまわずに、懐に向かって囁いた。

「どうだい、賑やかだろう久遠。気に入ってくれたかな？ 君はずっとこんなところに来たがっていたから。人が多くて活気があつて前は直ぐ疲れてしまうから、だめだったけれど、今ならどこにでも連れて行ってあげられる。しばらくはこんな所にいようか？ それとも、花畑にでも行こうか？」

誰に向けているのか、微かに微笑みさえ浮かべる青年の傍らには誰もいない。それでも青年は囁き続ける。

「君がずっと行きたがっていたところだ」

ふと、青年が足をとめた。

人ごみの中でやはり足を止め、誰もがあえて見ないようにしている青年を、真つ向から見詰めている壮年の男がいた。がっしりとした体に巖のような顔。特徴的なのは、左目の眼帯だろうか。

男は声も出さずに唇だけを動かした。青年は一度頷き、男は路地裏へと歩き始めた。青年もそれを追う。

やがて二人は人気のない場所へとたどり着いた。男と青年は最初に対峙した距離を保っている。この距離が最低限の間合い外だった。この間合いの外より攻撃する方法はいくらでもあるが、不意打ちではない対峙している場合、直ぐに気取られて反撃を食らう。すぐさま有効な攻撃を加えるには、あと半歩ほど踏み込まなければならぬ。

だが、そんなことにはならないだろうと青年は判断していた。

確かに自分たちは針一本、いや素手でさえ、人を殺すことが出来る。そういうモノだ。だからこそ、仕掛けるときに、気配を隠しませず、相手の前に堂々と姿をさらすことはない。

おそらく以前には？駒？として使われていたが、負傷し、魔法義肢が体質的に合わなかったがために連絡係にまわされたものだろう。

「東倶の永だな」

青年　永は頷いた。

「？裁？からの決定を伝えにきた」

男は名も告げず伝言だけを告げた。

「異例のことだが？裁？はお前の申し出をうけるそうだ。組織内部の沈黙を条件に？裁？はお前から手を引く。だが、お前を追う組織からの依頼があれば、人材を派遣しないわけにはいかない。だが、？裁？はその後については関知しない」

？裁？とは暗殺を請け負う組織である。暗殺だけではなく、暗殺から身を守るための護衛をも金次第で派遣してくれる。この大陸のどこか、あるいは、別の名で知られている地域　一つではないにあるといわれている。しかし公式にはそのような組織の存在は、確認されていないことになっている。

だが、現実には？裁？は存在し、多くの国や組織が刺客、あるいは護衛を雇っている。どこの国や組織にも、奇麗事だけではやっていけない事情があり、内部での権力闘争もある。そうした権力者にとっては、あるはずのない暗殺組織は都合がよい。

国々に黙認されている幻の暗殺組織、それが？裁？である。

手配された刺客、あるいは護衛に、？裁？の内部情報を問うのは暗黙の了解により出来ないことになっているし、実際に動くものにも守秘義務が課せられている。とくに組織の場所などは、白白ぐら
いならば自決するように教えられている。

組織にとつては、内情を知るものの流出は死活問題である。その技術の独占を狙うものから、暗殺を恐れての撲滅まで、？裁？を狙うものも少なくない。

故に、組織を抜けようとするものには例外なく刺客を送る。

しかしそれは、たとえ成功したとしても無報酬には違いない。刺客 人材は間違いなく？裁？にとつての財産である。そして補充しようにも、個人の技量というものは同じものはない。新しく人材を育てようにも、時間がかかる上、計算どおりに育つものではない。失つてしまえば取り返しがつかない。

返り討ちにあうということは、貴重な資源の浪費、損失となる。多くの人材を失った？裁？は、永からの異例とも言える提案を受け入れたのである。

すなわち、仕事として依頼されれば人材を派遣するが、組織は？裁？は今後、組織単体で永に刺客を送ることはない、と宣言したのであった。

「本来なら、逃亡者を生かしておくのは、組織の存続をも危険にさらしかねない事態だが、死なないお前を処分するには、更なる人材の投資がいる。すでに失われた人材だけでも採算が合わん……個人的な意見を言えば、我ならば、そのような厄介な代物は、さっさと手放すかな」

「……それ以前に、組織を出ようとも思わないだろう」

「違いない。お前は自分の意思で？裁？を抜けた。そんなことが出来るはずがないのにな。」

だが、それほどの価値のあるものか？ お前が抱えているものは「

ある。傀儡くわいには分かるまい」

傀儡とまで言われた男は微かに不審そうな顔をしただけだった。

「？裁？は手を引くが、お前を追うものはまだまだ多い。どこまで逃げ続けるつもりだ」

「必要ならば、どこまででも」

「ならば、好きにするがいい。すでにすぐ後ろまで来ているが……お前の相手ではないな。どこまでも行くがいい、いけるものならば」

男が背を向けると、永の後ろに隠れていたものが、通路を塞ぐように現われた。

単眼の男は予備動作もなく跳び、壁に取り付くと一気に屋根まで達した。そのまま駆けるように屋根の向こう側へ姿を消した。

ただの人には、男が一瞬で消えたとしたか、思えないだろう。

なかなかの腕だ　と永は思った。

「今、人が消えなかつたか」

「ばかな、見間違いだ」

こそこそと、男達が囁き交わす。

永はゆっくりと振り向いた。

永の一瞥を受けて、一瞬、男達が息をのんだ。党首格らしい男がそれを振り払うように、声を上げる。

「きさまが永だな」

「……確かにそういう名だが、何用だ？　物取りか？」

永はそつと懐に手を当てた。

そこにあつたふくらみが見る見る平坦になつていくのを激昂した男は気づいただろうか。

「誰が、物取りだ！　我々は魔道師ギルドから派遣されたものだ！

きさまが魔道師ギルドから持ち去ったものを返してもらおうぞ」

「人を泥棒のように言つな。不当に持ち去つたものなどない」

「こいつ、ぬけぬけと！」

「やっちまいますようぜ、相手は一人だ」

最初からその気の癖に、今そう決められたかのように下っ端たちが言う。

ありきたりな三文芝居だと、永は心の中で呟いた。

「まあ、待て。俺達の仕事はこいつを殺ることじゃあ、ない。ブツを取り戻すことだ。今こいつが持っているなきや、取り戻せるものも取り戻せねえ」

男は手下に言い聞かせるようにして、実は永に聞かせている。脅しのつもりらしい。数の優位を疑いもせず、続ける。

「どうだ。ブツを素直に渡せば、命は見逃してやってもいいんだぜ。俺達だって無用な殺生はしたかねえやな。どうする？」

「……お前たちは、取り戻すべきものが何なのか、聞いているのか？」

「なにい！」

男達はいつせいに刃物を抜いた。

永はおくしもせず問い返す。

「取り戻すものが何か、知っているのか？」

「おとなしくしてりゃあ、付け上がりやがって、手前が、魔道師ギルドの裏のお尋ね者になってるのを、知らねえとは、言わさねえぞ！ 表沙汰にできねえからには相当やばいもんらしいな。だからって、泣き寝入りするわけにゃあ、いかねえんだよ。四の五の言わず、さっさと出すもん出しゃあがれ！」

魔道師ギルドでは魔法に関する様々な研究がされている。個人での研究も盛んだが、そういうものの中には、一般に知られれば非難を免れないものもある。禁断の実験に手を染めるものも少なくない。ギルドがそれを察知した場合、それなりの処置がとられるがそれらの実験結果はギルド内に秘匿される。

そういう禁断の品に関することは公に出来ないだけに、密かにそれらを処置する『裏』と呼ばれる部門がある。だが、それらも下端になれば、そこいらのゴロツキと変わらないものもいる。

「……何も知らされていないわけだな。命が惜しければ、帰れ。久遠は、誰にも渡さない」

「こいつ、命がいらねえらしいな！ やっちまえ！」

首領格の合図とともに、十人ほどの男達がいつせいに襲い掛かった。

そして、裏通りの一角で惨劇が起きた。

永が裏通りから出ると、出口の辺りに小柄な男がいた。

一見、丸腰に見える男の前で、永は立ち止まった。

男はにっこりと笑った。

ふわふわの金の巻き毛に、愛くるしい童顔。無邪気な天使のよう

な微笑みだった。

だが、そのとき確かに空気が凍った。男と永のあいだには？ 裁？
の男のときと同じ　あるいはそれ以上の緊張が走った。

「やらないのか？」

「やんない」

男は即答した。

大きなアンバーの瞳で永を見上げる。

「あんたが無事で出てきたってことはさ、やつちやつたんだろ？
そんな手誰を相手に一対一で真っ向勝負？　遠慮させてくんない？
そこまでうぬぼれてないよ。俺はさ、やめとけて、言っただけだぜ。どう考えても、誘いじゃん。あんた、気づいてたろ。前、歩いてたのも、素人じゃねえしな。そいつはどうしたんだい？　一緒にじゃねえの？　ま、どっちでもいいけど。あいつら、最近組んだんだけど、素人の相手ばっか、してみたんだよね。金に目が眩んで、手え出したのは軽率だったけどさ、相手の力量も測れねえ奴は、長生きできねえよな。まー、こっちから仕掛けといてなんだけど、見逃してくんない？　俺らの仕事はあんたを見つけて出すことだけだよ。その後のことは、担当者がつくまで保留だったはずなんだよね。旦那もあんま、時間かけるのも、不味いだろ。人が来るしさあ。ここは痛みわけってことで」

一気にまくし立てた男は天使のように微笑んだ。

よく喋る男だ、と永は心の中で呟いた。

「……よかるう」

「じゃ、そーゆー事で」

永が立ち去るのと入れ違いに男は路地裏へ向かった。入り口の辺りに、いざというときのため配布されている呪符を貼り付ける。

せいぜい認識攪乱してくれる程度の呪符だが、これではらくは、この路地には誰も入ろうとは思わない。

それを見て男は目を丸くした。

「おやまあ」

予想していたものの、見事に血の海だった。

男は怖気づく様子もなくしゃがみ込み、あたり一面に散らばった仲間の死体を眺めた。

首を刎ねられた者。胴体を輪切りにされたもの。袈裟懸けに切られたもの。頭から股間まで唐竹割にされたもの。斬られた場所は様々だが、全て一刀の元に葬られている。

「いゝ腕じゃん」

男は手前に転がっていた元仲間の首を拾い上げ、しみじみと切り口を眺めた。

「すつげえ、切り口。惚れ惚れするほどだねえ。だから、やめとけつて言っただけ、長柄^{ながえ}。旦那にも言っただけ、相手の力量もわかんねえ奴は長生きできねえよ。あんた、素人相手に粹がつてたけどさ、本物相手にしたことなかつたろう。まあ、後悔もできねえだろうけどな。人の忠告は聞くもんだぜ」

男はまるで生きている相手のように生首に話しかけ、陽気に笑った。やがて、飽きたのか無造作に生首を捨てると、立ち上がって周りを見渡した。

「やんなくて、正解だったかな」

男は喉を鳴らして笑ったが、別れた後の永の姿を見ていれば、また違った答えを出していただろう。

男と別れた永は、直ぐに人影のない路地に逃げ込んだ。膝が砕けて地面にくず折れる

悲鳴はない。だが、蒼白になり全身に汗をかいている。腹部を押さえて細かく震えるその姿は明らかに苦痛を堪えている。

どのような苦痛がその身を苛んでいるものか、それでも永は声を殺して耐えていた。

不意にその震えが止まり、呼吸が落ち着いた。身を起こす永の懐から、何かが転がり落ちた。

透明の、両の掌で包み込めるほどの大きさの球体。

永はそれを拾い上げた。

大事そうに掌で包み込み、その中でたゆたうものに永は優しく語りかけた。

「大丈夫。耐えられるから。大丈夫だ。またすぐに君のために戦える。久遠」

鋼鉄の淑女

「永に手を出したのか？」

報告を聞くなり本部からの使者は不機嫌に言い放った。担当者の到着まで監視するように命を受けていた支部の役人は頭を下げる。

「申し訳ありません。見つけても、まずは報告するように通達しておりましたが、以前つけられた報奨金の高さに目が眩んで、自分たちの手柄にしようとしたようです」

あるいは無理のないことかもしれない、と役員は思った。問題の男につけられた金額たるや、襲撃に参加したものの全てが遊んで暮らせるような額だったのだ。

だが、少しでも頭のある人間ならば、裏とはいえ、それだけの賞金をかけられ、なおかつ二年もの間逃げおおせている事実の意味に気づくだろう。役員も報告されるまで迂闊にもその事実には思い至らなかった。

累々たる屍を目の前にして、改めて通達の意味を思い知ったのである。

「……迂闊なことだ。何人だ」

「死亡したのは十人です。こちらで手を回してもみ消しました」

調べられれば立場が悪くなるのは魔道師ギルドのほうだ。強盗を返り討ちにしても罪には問われない。その強盗がギルドの子飼いともなれば、いかに政治的に手を回そうと、評判が落ちるのは否めない。

死人には気の毒だが、何もなかったことにしなければならぬ。幸いにして討ち取られたのは身元も不確かなゴロツキどもだ。ある日いきなりいなくなっても、誰も騒がない。

「待て、死亡したのは、だと？ 生き残りがいるのか？」

「はい。そのものの手配で、死体は人目に触れずに処分いたしましたので、何も起きなかった事にしてあります」

使者は考える様な素振りを見せた。ややあつて役員に尋ねる。

「……無傷なのか？ その生き残りは」

「はい。報告書は出させましたが、直にお聞きになるほうがよろしいかと、別室に控えさせてあります」

「……会おう。永相手に生き残るとは、貴重な存在だからな」

部屋での待機に飽きてきた蹄ていは、机の上に足を乗せるといっただらしない格好をしていた。

蹄はあの後ギルドへの連絡を済ませ、せつせと後始末、証拠隠滅に働いた。体を使う仕事の方が、報告書の提出やら弁明よりはまじだった。自分がしたこともないのに、弁解しなければならぬのは馬鹿らしい。しかし何よりも、次の方針が決まるまでの待ち時間が嫌だった。

手持ち無沙汰は嫌いだ。休みなら遊びにもいけるが待機中では、そももいかない。

時間だけが無為に流れる。

さつさと次の仕事の話にならないかと、あくびをしたときだった。顔見知りの役員が部屋に入ってきて、嫌そうに顔をしかめた。だらしない格好がお気に召さなかつたようだが、それでも役柄無視するわけにもいかないようで、蹄に声をかけた。

「ああ？ 本部のお偉いさんが俺に会う？ なんで？ ああ、そいつの下に付けばいいんだね」

よくある展開だ。前に聞いていた担当者が到着したのだろう。これからその担当者に手足として使われるのだ。時としてトカゲの尻尾として切り捨てられるのも契約のうち。

どうせこれからあの永とかいう、とんでもない相手を追いかけることになるのだろう。

死体の寒気がするほど見事な切り口を思い出し、蹄は内心肩をすくめた。

真正面からぶつかって勝てる相手かといえば、難しい。事情が許

されるのなら、さつさと尻尾を巻いて逃げ出している。

使う方はそんなことはお構いなしに、ふんぞり返ってどうにかしろと注文するに違いない。せめて頭の切れる、仕え概のある相手なら嬉しいのだが。

端にも引つかからない馬鹿に振り回されて使い捨てられるのは嬉しくない。

どうせいつか野垂れ死にする身でも。

「妙齢の美女ならいいんだけど、ギルドで認められてるってゆーと、歳食ってるだろーし、ふつー男だよなあ」

今までの雇い主などを思い起こし、ああ、つまらん、と蹄は心の中で呟いた。

「お前が蹄か？」

灰色の瞳に強い光を宿し、その人は蹄をねめつけた。

ばつさりと、肩の辺りで切られた灰色の髪が瑕といえは瑕だが、似合わなくもない。やや知性が先にたった硬質の美貌。色気のない武具に包むにはあまりにも勿体無い、けちのつけようのない見事な肢体。魔道師ギルドで地位のあるものとしては異例なほどの若さ。

妙齢の男装の美女の出現に、蹄は目を見張り、頭の前からつま先までを値踏みして にやけた。

(いるところには、いるじゃーん)

内心で快哉を叫び、蹄は上機嫌で答えた。

「はいはい。お尋ねのわたくしが蹄でございます」

あからさまに美女の顔が引きつった。役員の方に向き直る。

「本当に、この男は永と対峙して生き残ったのか」

小柄で痩身。ふわふわの金の巻き毛に、いつそ愛らしいといってしまうほど顔立ち。童顔なのもあいまって、蹄を手練だと見破るのは玄人でも難しい。

「懸念ももつともなことだと思いますが、蹄は我々の使っている者の中では一番の手練でして。実は」

役員が美女になにやら耳打ちをした。

「本当か？」

美女はなにやら考えているようだった。

「……蹄、お前は生き残りだそうだが、あの永を襲撃して、どうやって生き残った」

蹄は芝居がかった大げさな身振りを加え、語りだした。

「おお、淑女よ。良くぞ聞いてくださった。我々は手配の永の姿を大通りで発見いたしました。彼奴は追われていることなど知らぬかのように裏道に入りましたので、他の者が困んで品物を取り上げようと言いました。ワタクシめはなにやら嫌な予感がありましたので、ここはギルドに連絡し、指示を仰ごうと発言しましたが、まったく無視され、仲間が凶行に及びました。ワタクシは見張り দিয়ে やがて永が一人で出てまいりました。ワタクシが確認すると、あたりは血の海。皆死んでいました。配布されていた呪符を使いました。道を封鎖し、ギルドに一報したわけでございます。その後は死体や血痕を魔法薬で処理いたしました。それで あいつは何者だい？」

そこで蹄は表情と口調を変えた。

「切り口を見たが、ただモンじゃねえ。全員を一太刀で殺ってやる。頭つから唐竹割りにされた奴もいるぜ。あそこまで見事な切り口はなかなかお目にかかれねえ。素人じゃねえのは一目瞭然だが、それだけじゃねえだろ。出し惜しみは無しだぜ。情報ひとつで命無くすこともあるからな」

軽薄な笑みは消え、剣呑な光を目に宿した蹄の表情に、女は頷いた。

「……なるほど。貴様も素人ではないか」

女は嬉しそうに笑った。

「よかるう。だが、今この瞬間から貴様に拒否権はない。わたしの命令には従ってもらう。これはギルドの最重要機密だからな」

「もともとその気だろう」

「そのとおりだ。これも礼儀のひとつ思ってもらおう」

「まず訊いておくけどよ、永は何を持ち出した？ 俺は聞いていないんだけどよ、いったいななんだ。特徴は？ なんだってギルドは取り戻そうとしてんだ。取り戻すべきものがわからなきゃ、目の前にあってもわからないぜ」

本来なら訊いてはいけないことだ。二年以上追い回しているとなると、かなり貴重なものであることは察しがつく。

ことによっては取り戻したあと、蹄自身が消されかねない。しかし、予想に反して美女はあっさりと教えてくれた。

美女は両の掌で包むこめる程度の円を作った。

「これくらいの培養球ばいようきゅうの中で作られている最中の魔法生物だ。この世でたつた一つの……特別な研究により作られたものだ」

培養球とは、事情により培養槽が使えないとき代用として使われるものだ。本来の大きさは標準の培養槽並みの大きさのあるものだが、縮小軽量魔法がかかっており、持ち運びできる大きさになっている。

開発途中、もしくは新機能でも備えたものなのかと蹄は思った。

特別な研究とやらの内容は……聞いてもわからないだろうから、訊かなかった。魔道技術には詳しくない。

取り戻すべきものが培養途中の魔法生物と分ければ上等なのである。よほど価値のあるものなのだろう。

女はこぶしを握り締めた。

「なんとしても取り戻さねばならないものだ。そのためならば、ギルドは人材、資材、財力を惜しみなくつぎ込む」

女の目が険しくなっていくのを蹄は感じた。

「さて、永のことだが、奴は？ 裁？の一人だ。いや、元？ 裁？ だといつたほうが正しいかな」

「？ 裁？ だつて？」

さすがに蹄は？ 裁？ の名を知っていた。

「そういうことは言つといてくんない？ 長柄だつて？ 裁？ だつて知つてりゃ手えださねえよ」と、元つてことは抜けたのか。よく

「？裁？が許したな」

「許したくはなかったらうな。異例のことだが、わざわざ書面で通達してきた。永からは手を引くと」

「？裁？が手を引くだけの手練ねえ……どの程度の商品だったんだい」

「？裁？の扱う人材も値段によって様々なランクがある。一概には言えないが、それで相手の程度が予測できる。永がかなりの上物だったことは明白だ。」

「永は最上級の一人だった。もともと久遠の護衛として？裁？から派遣されていたものだ」

蹄は目を見張った。

「久遠つて、魔道師ギルドの天才と言われてた女じゃなかったっけ？ 確か二、三年前に死んだって聞いた」

「……そうだ」

久遠。この天才魔道師の名を知らぬものは大陸には居ないだろう。たった一人で魔道技術を数百年分、推し進めたとも言われる、奇跡の天才だ。人前に姿を現すこともなく、一説では魔道師ギルドが作った偽名で、個人の名ではなく優秀な魔道師を集めた集団ではないかという風聞が流れたほどだ。

魔道師ギルドが他の魔道技術を売り物にするところに大きく差を開けているのは、久遠による、魔法動力発生機器の小型軽量化。もっとも得意な分野と言われた、魔法生物作成。魔法生体への魔法付加。誰も考えもしなかった魔法生体を使用した魔法義肢まほうぎしなどの研究成果である。

この久遠は数年前死んだとされている。本当に久遠が実在した人物だとしたら、その命を狙うものは多かつただろう。

その筆頭は、魔法生物嫌いのオードウグ教。差をつけられ続けた魔法技術を売り物にする組織。そして才能をねたんだギルド内部の人間。人よりぬきんでているということは、それだけで憎まれるネ

夕になる。

「永に賞金がかけられたのは、その後だったよな。つまり、久遠が死んだのは永が出し抜かれたってわけかい」

「いや、あの子は産まれつき体が弱く、長くは生きられない子だった。永とは久遠の命が尽きるまでという契約だったから、奴は久遠を守りきった。無傷ではなかったがな」

暗殺の手段を知っているということは、守り方もおのずとわかる？ 裁？の護衛が優秀なのは暗殺の手法を知り尽くしているからだともいえる。

「ああ、忘れるところだった。奴の体は任務中の負傷により、大部分を魔法義肢に交換している」

魔道師ギルドの専売特許ともいえる魔法義肢は、それまでせいぜい単純な動作を代用するに過ぎなかった義肢を、完全に元通りの四肢と同じように使えるほか、感覚まで伝えてくる完全なる代用品に変えた。

唯一、体質により適用できる者とそうでないものがあるため使用者が限定されるという欠陥があるが、四肢どころか眼球、聴覚、嗅覚、一部の内臓まで代用が効き、さらに魔法付与による仕掛けが仕込めるといふ利点さえある。

この魔法義肢の登場により、多くの命が救われ、体の不自由になった人が、復帰できるようになった。

軍隊や傭兵部隊、さらには？ 裁？のような秘密組織が魔道師ギルドと誼を通じようとするのは肉体を損なう恐れが多いためだ。

魔法義肢は肉体強化も可能であり、魔法付与による戦闘力の向上も望める。

「仕掛けとか……は……あるよな。やっぱり」

「久遠が永のために作った特別製で、仕掛けてんこ盛りだ」

「……？ 裁？ 最高峰の技術に、天才久遠渾身の戦闘用魔法義肢？

……逃げていい？」

「だめ」

簡潔な答えに蹄は肩をすくめた。

「言ってみただけさ」

こうまで悪条件が重なれば腕に覚えの無いもの、または中途半端な技量のもの、尻尾を巻いて逃げるだろう。それで情報を伏せていたに違いない。

「ついでに言っておこう。永を追う上で一番忘れてはいけないことがある。それは、永が死なないということだ」

蹄が眉をひそめた。

「死なない？ 首をはねてもかい？ あいつはアンデッドなのか」

「永は封じの秘術によつて？ 命？ を何かに移し変えている。それが失われない限り永は死ぬことはない」

「封じの秘術つて、あの幻のかい？ 本当にあつたとはね」

封じの秘術とは、密かに囁かれる不死術のひとつだ。

何かに命を封じることにより、肉体自体をいくら傷つけられても死ななくなる。そのかわり、その何かが悪されたり、失われた場合、即座に命を落とす。そして何か期限条件をつけなければならぬ。このようにある意味限定された不死術だ。

限定されているのは不死術の意味がないと、一部では軽視する向きもある。

話だけは大陸中に伝わっているが、少なくとも蹄は、その術が本当に使える魔道師にお目にかかったことはない。

「誰がかけた？」

「久遠だ。あの術は使える魔道師がほとんどいない。久遠は数少ない術者の一人だったが、あの術はそう簡単に使えるものではなく、体調も考慮して禁じられていたはずだった。永が魔道師ギルドからいなくなる少し前にかけたらしい」

「……久遠と永はどういう間柄だったんだ？ ただの護衛と護衛対象つてわけでも無さそうだな」

「……久遠は永を愛していた……」

女の声は怨嗟に満ちていた。無表情を装い、抑えようとしていて

も滲み出る憎しみ。女と久遠も無関係ではないようだと思はれた。

女は久遠をあの子と言った。親しくなければ出てこない言葉だ。

「……殺せない……止めだな。どうしろとゆーのかな？」

お手上げと蹄は両手を広げて見せた。

「捕らえる」

蹄は顔を引きつらせた。

「お嬢さんつつつ！ 問答無用で殺すのと、生きたまま捕まえるのと、どっちが手間だか知ってるかい？」

女は眉ひとつ動かさずに答えた。

「殺しても死なないと言つてあるだろう。それに、貴様の特技を使えば、出来ないことではないだろうが」

「そりゃあ、やってやれないことはないけどさ。難しいと思うぜ」
蹄は不敵な笑みを浮かべた。難しいが、不可能ではないらしい。

「間ができりゃあな。不意を突けるようなら一発なんだが、あいつも玄人だしな」

「間とは？」

「隙ってゆうか、集中力、意識をちよつとの間だけでも乱してくれりゃあ、出来なくもない」

すつつと女が目を細めた。

「他のものへ意識を集中させるのは、どうだ」

「他への意識がお留守になるなら、なんでも。できるのかい？」

「造作もない。わたしがその間を作ってみせよう」

女は自信をもって答えた。

「それに、永の魔法義肢には致命的な欠陥がある。そこを突けば、捕らえることは可能だ」

「致命的欠陥ね。拝聴しましょうかね」

蹄は改めて話を聞く体制を整えた。

たくらむ者達

「天才久遠、最後の作品ですと？」

「さようです」

本社から派遣されてきたという男は笑顔で答えた。中背中肉、ほどほどに整った顔。その細すぎる目をのぞけば、特徴といえるものがない。若くも見えるが、老成したようにも見える不思議な空気を纏っていた。

どちらにしろ、カトラス商会の中枢を担う一族のものであるには違いない。

「それだけでも価値のある作品ですが、今までにはない画期的な手法によって作られているものなのです。もし、我々の掴んだ情報が確かなら、どのような手段を使っても手に入れたい品物です。我々は何度も持ち主と交渉いたしました。金額だけでなく、様々な条件も申し入れましたが、どうあっても手放さないと、こうおっしゃるのですよ。我々としても誠意は見せましたが、お気に召さなかった次第で」

男は芝居がかった素振りで首を振る。

「しかし、どうあっても、我々はそれを手に入れたいのです。お分かりですね？ 香昌カトラスさん。もし、誰かがそれを手に入れてくだされば」

男はそこでいったん言葉を切った。先は言わなくても分かるだろうといわんばかりの視線を香昌に向ける。

むろん、読み間違える香昌ではない。どのような手段であれ、それを手に入れればカトラス商会の中での出世は間違いない。いつまでも地方の支部長のままではなく、本社への栄転もありえるだろう。

「それ以上は言われなくても、けっこうでございますとも。お話はよく分かりました。カトラス商会のためになることでしたら、尽力

いたしましよとも」

願ってもないチャンスだった。天才久遠の作品。それも最後のものともなれば、値段は天井知らずだろう。それも、商会が欲しがるほどの画期的な手法ともなれば、どれほどの手柄となるか。

「期待しておりますよ、香昌さん」

神は鳥に飛ぶことを許し、魚に泳ぐことを許した。

そして人は神より魔法の力を使うことを許された。

人の子よ。この力はそのままで何も出来ない。研究し、研鑽しなさい。この力はやがて全ての生き物に許したものと同じことができる。

しかし人の子よ。忘れてはならない。命を生み出すことは、神にだけ許された業である。

オードウグ教の教会。そこに集まるものは、敬虔な信者もいるが、ただ魔法技術を使用したいという者も多い。

しかし、今そこにいるのは、紛れもなく信仰心に厚いものであるう。

がっしりとした軍服が似合いそうな逞しい長身に纏っているのは、教団の人間だけが着用を許される教団服である。

その整った細面の顔には真摯な情熱が込められている。彼が手にしているのは 雑巾であった。

手練の技で磨き上げられた床には塵ひとつ落ちていない。

「宣教師ランバトル様、もう、おやめくださいませ」

赤毛をお下げにした少女が真摯な表情で宣教師を止めた。

さして特筆するような美しさをもった少女ではないが、年相応の愛らしい素朴な少女である。その小柄な体を包むのは、オードウグ教の女性用の教団服である。

「教女アンジユラではないか。なぜ某をとめる」

少女は懂れと、尊敬と、緊張の入り混じった複雑な顔で宣教師に

訴えた。

偉い人に意見するなど、アンジュラには恐れ多いことだったが、これだけは言わなくてはならない。

「ランバトル様はお偉い方ですわ。教団のため、その身を捧げていらつしやる。そのような方に、水汲みや、はたきがけ、さらには掃き掃除や雑巾がけなどをさせるなど、あつてはならないことですよ。そのようなことは、わたくしのような、見習いの仕事でございます。わたくしにやらせてくださいませ」

「教女アンジュラよ。思い違いをしてはいけない。これは某が自らに課したことなのだ」

宣教師は厳かに言った。

「某は神威代理執行局に属しておるが、その信仰はそなたたちとなんら変わりはない。我が勤めのため一所で神への奉仕が叶わぬゆえ、初心を忘れぬため、世話になる支部の清掃は我が手ですと決めておるのだ」

その様子は、まさに信仰に生きる聖職者にふさわしい敬虔なものだった。その右手に握られている雑巾さえなければ。

それでもアンジュラは食い下がった。アンジュラからしてみれば、ランバトルは神威代理執行局という、選ばれた人間なのだ。その偉い人に自分たちと同じ仕事などさせられない。偉い人にはそれに相応しい尊い仕事があるはずなのだ。

「宣教師ランバトル様、尊いお志ですわ。でも、でもせめて乾拭きだけは、わたくしに任せてくださいませ」

「うむ。教女アンジュラよ。そなたの信仰、とくと見せてもらったよ。乾拭きはそなたに譲ろう」

「ありがとうございます。宣教師ランバトル様」

大真面目に、涙さえ浮かべた会話であった 廊下をかける

音とともに、扉が乱暴に開けられた。

「ランバトル様、発見しました。永です」

「なに！ 場所は！」

「先行しているものが後をつけております。しかし、他にも永をつ
けねらっている者がいるとか。早くしなければ、見失います」

「分かった。すぐ行く」

アンジユラは緊張した。いよいよ、これからランバトルは本当に
やらなければならぬ尊い仕事が待っているのだ。それはときに死
を覚悟しなければならぬほど危険なものだという。

「宣教師様、乾拭きと後片付けはわたくしが。どうぞご武運を。ラ
ンバトル様に神のご加護がありますように」

少女はランバトルのために祈った。

「うむ。そなたにも、神の祝福があるように」

道化師の罖

永は人に紛れるのには適した姿をしていない。その容姿は一度見たら忘れられない、見つけようと思えば、すぐに見つかる。

それを自覚しているのか、永は姿を隠そうとはしていなかった。堂々と街中を歩き回る。

その姿を探し求めていた者達は、そろそろと永をつけ回しながら期をうかがっていた。

それを知ってか、知らずか、永は人気のない裏通りに足を踏み入れた。土地勘のある追跡者たちは先回りをして永を待ち伏せた。永は警戒する素振りも見せてはいなかった。

十人ほどの男達が永の前に立ちはだかった。

「永だな」

「そうだ。遅かったな」

当然のように永に言われ、男達は怪訝そつな顔をした。

「面倒は早く終わらせたい」

つけられているのを知っていて、わざと永は仕掛けやすい裏通りに向かった。

「……ものを渡す気はないって訳か。油断するな、一人とはいえ、？ 裁？ だ」

男達は永を取り囲んだ。

永が腰にさしているのは長剣。永はそれに手をかけようともしていなかったが、男達はいつ永が剣に手をかけるかと警戒し、油断なく間合いを取っていた。それが命取りになった。

永の手元に、いつの間にか掌の長さほどの刃物が現われた。と同時に永はそれを投げ打っていた。

剣ばかり警戒していた男達にそれをかわせるはずもなく、先頭の男の喉笛に突き刺さった。永は刃物を投げ打つと同時に猛然と間合いを詰めていた。その手元に手妻てつまのように同じ形の刃物が現われた。

掌ほどの長さの先端が尖った刃に握りのついた形のそれは、手裏剣として使うこともできれば、刃として切りつけることもできるものだった。

永は一瞬にして一人の喉を掻き切った。

刃物は両手に一本ずつ握られており、氣勢を制して相手の懐に飛び込んだ永は、もう一本の刃を別の男の眼窩に突きこんだ。

反す刃で、他の二人の男の喉を切り裂く。相手に悲鳴さえ上げさせない一瞬の出来事だった。

瞬く間に半数を葬られ、男たちに動揺が走った。男達は十分注意しているつもりだったのだろうが、？裁？を相手にするにはまだ足りなかった。自分たちが相手にしているのが死神も同然の男だと、永の容姿を目にした男達は気づかなかつたのだ。

囲みを抜けて走り去ろうとした永の前に、白いフードつきのマントを纏った一団が立ちはだかつた。

永は距離をとった位置で足を止める。

その一団の風体には覚えがあつた。

先頭の女が声をかけた。

「永ですね。神の御心に添わぬものをよこしなさい」

永は自分の失策に舌打ちしたくなつた。

永を追いかけている組織は、一つや二つではない。分かつてはいだが、こんな形で鉢合わせるとは。

後ろのゴロツキが永に追いついた。自分達の獲物が別の集団と対峙していることに気づき、思わず威嚇する。

「そいつは、俺達の獲物だ。手を出すな！」

「獲物にされるのはどちらです？ あなた方に永は倒せない。退きなさい。邪魔です」

永が本気で逃げたのではなく、殲滅するため 追いかけてさせて統率が乱れたところを一人ずつ返り討ちにする の策だと見抜いた女がゴロツキ達に命じる。気品さえ感じさせる物言いは、明らかに男たちとは別物だった。

その会話の一瞬、永は刃物を投げ打っていた。女は危うい所でそれをかわし、刃物はマントを切り裂いただけだった。

それは牽制にすぎなかった。永はより薄い所、ゴロツキの方へ向かっていった。

白いマントの一团　十二人ほど　はマントを脱ぎ捨てた。その下には、白く輝く鎧のような物を纏っていた。

見るものが見れば、それがオードウグ教の、神威代理執行局のものだと分かっただろう。

神威代理執行局は、宗教弾圧よりオードウグ教の信者と教団員を守るために結成されたとされるオードウグ教の僧兵集団である。その武力は、一国の軍隊をも軽く超える。

その特徴は、オードウグ教で神が人に与えたとされる魔法を最大限に使う。彼らが纏うプロテクターも魔法で強化されている聖衣と呼ばれるものだ。鈍らな剣では傷ひとつつけれない優れたものだ。

むろん、永もそれを知っていたが、それを目にした永の感想といえば

(ぐずぐずしていると、奴が来る) というものだった。

永の腕をもつてすれば、スタンダードの聖衣くらいは斬ることもできるが、それでは長剣の強度を越えるかもしれない。武器の破損は命取りになりかねないし、何よりもオードウグ教といえば、奴が出てくる。

少なからず苦手とする相手と対面するのは、避けたい所だった

永の決断は、強行突破、逃走あるのみ。ゴロツキ達の時とは違い、本気で逃げにかかった。

追跡していたはずの永が真正面から向かってくるのだ、男達は慌てて永に切りかかるが、それはあまりにも稚拙だった。

永はその攻撃をかわし、鮮やかに喉を掻き切った。いつの間にか両手に握っていた刃物を投げ打ち、さらに二人を仕留める。

しかし、その間に後方のオードウグ教の神威代理執行官が追いつ

いていた　あまりにも速い　オードウグ教自慢の魔法薬で強化されていたのだろう。

腹を狙って繰り出された刃を　永は腹をかばって沈み込み、胸で受けた　刃は背中まで貫けている。鮮血を吐きながらも後ろに下がり、刃を引き抜く　その傷口が淡い魔法光を放ちながら塞がっていく。

永が封じの秘術によって不死であることを知っていながら、手応えに、一瞬しとめたと錯覚した男は、首を落とされた。

永が新たな刃を手にしたのではない。永の右腕の一部が刃に変形したのである。

魔法薬によりスピードを強化されていたのはその男だけのようだった。

とっさに逃げようとしたゴロツキを片手で掴み、後方の執行官のほうへ投げ飛ばした。見かけよりも永は力がある。それは魔法義肢の賜物か。

生きた障害物に執行官が怯んだ隙に、永は逃走に移った。

「おのれ、永！　神の敵の手先めが！」

生きた障害物を押しつけて、永を追いかけようとした執行官の前に、ひとつの影が降って来た。

「はい、それまで。あんたたちの出番は終わりだよ。引き取ってもらおうか？」

天使のような愛らしい顔に、無邪気な笑みを浮かべて、丸腰の若い男　蹄が言った。

「何者です！　お退きなさい。我々の邪魔をすれば、ただではすみませんよ」

「そーゆーわけには、いかないんだな。これが。俺達にとっては、あんたらが邪魔なんだよね。退いてくれる？」

「どこの組織のものは存じませんが、あのようなけがわらしいものを手にしようとする者達ですね。ならば容赦はいたしません」

「あっそ、なら、死んで？」

蹄は満面の笑みで答えた。

裏通りを逃走していた永は前方の人影に足を止めた。

永の足を止めたのは、たった一人だ。略式の革鎧を身に着けた若い女。硬質の美貌のなかから灰色の瞳が永を睨みつける。

「麗春……」

「久方ひさかたぶりだな、永。おまえが持ち去ったものを……久遠の体を使った魔道生物を渡してもらおうか」

轟然とした要求に、永は頭を振った。

「だめだ。久遠は渡せない」

それでもそれは、他の追手とは雲泥の差のある対応だった。

「言うな！ そんなものが、あの子のはずがない！ 久遠は死んだんだ！ それはただの、魔法生物にすぎない！」

「それを決めるのは、麗春ではない。久遠は生きている。眠りながら、目覚めるときを待っている。退いてくれ、麗春。久遠が悲しむ

麗春は久遠の

「言うな！ 永！ 久遠のことを愛してもいなくたくせに！

わたしが依頼したから、愛してるふりをしただけのくせに！」

麗春は永の不実を糾弾した。

そもそも、久遠と永がつきあっていたのは、麗春のたのみだった。

久遠が永に対して恋心を抱いていたことを知っていたから、慰めになればと。愛しているふりをして欲しいと。そのはずなのに、いつの間にか久遠は麗春よりも永を慕い信じた。麗春にはそれが許せない。

「わたしはあの子の亡骸を葬ってやることもできなかつた！ 永、おまえのせいだ！」

キン！ という甲高い音とともに、永の体がずれた。左足膝下、右足脛半ば、右腕肘、左腕二の腕の半ばからを、一瞬にして切断され、なす術もなく地に落ちた。

血は出ない。それは全て作り物だ。

「悪いねえ、旦那。見逃してもらって悪いけどさ、雇い主の注文な
んで。本当に、悪い」

にこにこ罪のない笑顔で現われたのは、以前襲ってきた追手の
一人だ。一人だけ襲撃に加わらず おそらくは仲間をだしに永の
腕前を測った男 名前は聞いていない。

永は苦しげに呻いた。

「貴様……？紡つむぎ？か……」

「あ、知ってた？ まあ、？裁？なら当然か。そつだよ、俺つてば
糸使い？」

糸と名称しているが、特殊な鋼糸で、扱い方によっては、人くら
いは切り刻める。

？紡？はその暗殺術に特出した暗殺組織であつた。

最大の特徴は、獲物の隠密性だ。

そつと知っていなければ、丸腰に見える。また、知っていたとし
ても、その細さゆえ、目で捉えるのは不可能に近い。

それだけに扱いの難しい武器ではあるが、男 蹄の技量は奇跡
に近い。

「よくやった、蹄。さすがだな」

「お褒めにあずかり、光栄でございます。これもご協力の賜物かと、
存じます」

芝居がかつた仕草で蹄は頭を下げた。

「他の追手はどうした？」

「片付けといたぜ。邪魔されるとやだから」

蹄はあっさり言ったが、十数人の人間を一人で倒したということ
だ。

さすがに麗春も驚いた。

「この短時間にか？……さすがだな。特別ボーナスを出すように言
つておこつ」

「そりゃどーも？ で、どうします？ こいつ」

「支部に連れて行く」

「はいはい。いいけどさ、大人しくしてると思っかい？」

「心配ない。そろそろくるころだ」

永は青ざめ、小刻みに震えていた。顔が苦痛に歪む。殺しきれない苦痛の聲が漏れ出す。

「こいつが、魔法義肢の欠陥ってやつかい」

「そうだ。これだけの損傷ならば、修復までかなり時間が稼げる。

その間、永は苦痛に耐えねばならん。いくら永でも、身動きもできぬ痛みだ」

久遠が永のために作った特別製の魔法義肢は、任意に変形し武器防具にもなるし、破損しても自己修復をするすぐれものだが、欠陥があった。

普通に使う分には何事もないが、変形させたり、極端に破損させると、通常の状態へ修復させるための信号が送られる。神経がその信号を苦痛と錯覚してしまうのである。

永はほとんど特別な機能を使わなかったし、使ったときに起きる痛みも幻肢痛だと思いついていた。

永の我慢強さが裏目に出て、発覚が遅れた。その欠陥が明らかになったとき、それを解決できる人間はすでに病床にあった。

「永を連れて来い。切断した魔法義肢も忘れるな。魔道師ギルドの極秘技術だからな」

「はいはい。人使いの荒い、お嬢さんだぜ」

「急げ。奴が来る」

「？ 奴って、誰だい？」

「オードウグ教の最狂兵器だ。オードウグ教が絡んできるとあれば、あれが出てくる」

麗春の苦りきった表情に、蹄はさすがにただならぬものを感じた。切断した魔法義肢を拾い集めて収縮符を張りつけて小さくすると、懐におさめ、永を担ぎ上げた。

細身に見えても蹄には力があるようだ。

担ぎ上げられても、永は抵抗しなかった。それどころではない苦

痛に苦しんでいるのだ。

「急ぐぞ」

「はいはい、仰せのままに」

道化師の罫（後書き）

捕まっちゃいました。考えてみると怖い画だ。

追憶の久遠

その場には、いくつもの死体が転がっていた。あまりにも凄惨な状態に、顔を背けるものも少なくない。いまさら死体の一つや二つに動じるものはいないが、あまりにも凄惨な殺され方をしている。

「これは永の仕業ではないな」

ランバトルは死体のいくつかを検めて言った。

「しかし、永を追っていた者達です。永に倒されたと考えた方が自然かと……」

副官が口を出す、ランバトルは冷静に否定した。

「永の手口にしては、おかしい。そちらの一撃で倒されている者は、間違いなく永の手口だが、これはあまりにも違いすぎる。永の手口は一撃必殺、余分な手間はかけない」

死体は全部で二十二体。そのうちの九体は致命的な一撃で命を奪われていたが、残りの十三体は文字通りバラバラにされていた。首、腕、足、胴体など、数箇所にとわって輪切りにされている。切られた胴体からは内臓がこぼれ落ち、臭気を放っていた。それが血臭と交じり合い、耐え難い臭気となっている。二体のゴロツキもそうだが、執行官も聖衣を避けた部分をきれいに斬られていた。

「我々執行官すら倒すものが、永の他にもいると？」

「そのようだ。ここまで切り刻むとは、容易ならざる相手だ。しかし、我々が急行していたというのに、これほど時間がかかる虐殺を許すとは……」

ランバトルは大きな間違いを犯していた。しかし、誰が信じるだろう、これだけの惨劇が一瞬に行われたなどとは。

やがてランバトルは一人一人の名前を唱え、死者を送る祈りを捧げた。やがて全員が唱和する。

「一足先に神の身元へ逝くいい。神はそなた達の献身を忘れはせぬ……そなたたちの信仰、しかと見せてもらったぞ」

きつと、ランバトルは顔を上げた。

「永を探せ。紅蓮と麗春もこの街に来ているとの情報もある。魔道師ギルドとカトラス商会の動きにも気をつけよ。よもやとは思うが……これだけの手練だ、永を捕らえた可能性もある」

「はっ！ 直ちに」

誰かが泣いていた。

あれは……久遠だ……左腕を失ったときの……病室で……

その時の刺客はかなりの手練だった。全ての武器を失っていたため左腕を犠牲にして、刃を受け止め、貫手で喉を抉って、何とか仕留めたものの、ギルド内で治療を受けるはめになった。

左腕は切断するしかなく、そのとき見舞いに来ていた久遠がベッドの横で泣いていた。

不思議な気分だった。依頼を果たすためなら、腕の一本や二本は仕方ない。それだけの強敵だったのだ。それよりも役目をまっとうできたのだから、悔いはない。

それなのに久遠は泣くのだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい、永……わたしのためにこんな……」
自分の身を案じる者がいるというのは、どうもおかしなものだ。

？裁？の者なら、永の身を案じるのではなく、優秀な道具が使えなくなるかもしれないと憂いるだけだ。たとえ永が死んでも？裁？の者は誰も悲しまない。ただ、優秀な道具が一つ失われたことを嘆くだけだ。

久遠のそれが、それとは違うことが分かるから、永は戸惑う。

「役目です……それよりも、あなたが無事でよかった」
無くしてしまったものは、仕方ない。

「久遠、大丈夫よ。不幸中の幸いと言ってはなんだけど、永は魔法義肢が使える体質だったのよ。すぐ不自由もなくなるわ」

永のためというより、久遠の嘆きをとめるため、麗春が優しく告げた。

「本当、姉さま。永は元通りになるの」

涙をためた久遠が麗春を振り返った。

「ええ。だから、そんなに泣かないで。体に障るわ。永の魔法義肢はすぐに造らせるわ」

「わたしが造るわ。永がこんなことになったのは、わたしのせいだもの」

そうして久遠は永のため特別な魔法義肢を作り上げた。

それが最初。

それから何度も永は負傷した。

そのたび久遠は永のために泣き、永のための魔法義肢を作った。

そして永は久遠のために同じ言葉を繰り返した。

「大丈夫です。久遠。またすぐあなたのために戦える。だから、泣かないでください」

虜囚

「だい……久遠……また……える……」

「うなされてるみたいですぜ」

「仕方あるまい。再生の苦痛はかなりのものらしいからな」

魔道師ギルドの一室。そこに永は横たえられていた。

斬りおとされた腕や脚は再生の途中であった。切り口から巨大な芋虫が触手のようなものが伸び、そこだけが別の生き物のようになっている。

「……あんまし、見場のするもんでもないなあ……苦しんでる旦那は妙に色っぽいんだけどよ」

「……そういう趣味なのか？」

「全然。女一筋ですぜ。そっちの方は」

「そういうことにしておこう」
永は苦痛のあまり意識を失い、過去の記憶の中に意識を飛ばしている。

それだけの苦痛だということだ。

「……これって永のためだけの特注品だろ？……なんで、魔道師ギルドがその欠陥に気づいたんだい？」

麗春が苦い顔をした。

「特注品でも、その資料は残っている。再現……いや、まったく同じものを作ろうと思えば作れる」

蹄は口の端に人の悪い笑みを浮かべた。

「作ったんだ……それでどうした？ 誰に何の目的で作ったのか知りたいなあ」

麗春が眉をひそめた。

「……分かっているだろう、貴様……」

「多分ね。旦那の性能を確かめようとしたのかい？」

「……永を追わせるために、魔法義肢を使える体質のものに試した

……結果ははかばかしいものではなかったが、同時に欠点も分かった」

「道具は使う人間次第だから……そいつはどうなった？」

長い沈黙の後、麗春は答えた。

「死んだ。永と違って、そいつには耐えられなかった。苦痛から逃れるために、自ら命を絶った」

「怖いねえ……人体実験って言うんだぜ、それ」

くすくすと蹄が笑った。怖い怖いといいながら、むしろ嘲るような笑い方だ。蹄が話題を変えた。

「品物を持っていなかったんですけど、どうしやす？」

永は蹄の手によって検査されていた。大量の武器は取り上げたものの（あまりの数に蹄は思わず歩く武器庫と呼んだ）目当ての魔法生物は発見できなかった。

「いま、宿を当たらせている」

永の外見は目立ちすぎる。一度でもその姿を見たものは忘れないだろう。宿をしらみつぶしに当たっていけば、泊まっていた所はすぐに分かる。

永が持ち歩いていないとなれば、麗春にはそこしか思い当たらなかった。

「宿なんて、そんな目立つ所に隠すかねえ」

「そこにはないと？」

「こいつも玄人だ。大切なもんを宿なんぞにおいてあるわけがない。どこかに隠してあったら、見分けられんぜ」

持ち物の中にないと分かれば、すぐさま搜索される宿の部屋などに置いてあるはずがないと蹄は主張した。宿の部屋など盗難の恐れもあるからだ。

「ではどこに？」

「……さあね。どっかの地面に埋めてあるか、どっかの家の屋根裏床下、石畳を剥ぎ取って下に穴を作って隠し場所を作る。考えればきりがない。玄人ってのは、そういうもんだ。自分にしか分から

んように隠したとしたら……どうしやす？」

麗春は少し考え込んだ。

「物に触れることで過去の記憶を読める術を使える者がいる。手配してもらおう」

「尋問は？ 本人に聞くのが一番手っ取り早いと思うけどね。」

「無用だ。？ 裁？ の者が尋問に屈すると思うか？ なによりも、まともになった永など、恐ろしくて近寄りたくもないな」

「同感。馬鹿なことをいいました。俺も不意打ちならともかく、真つ向勝負は遠慮したいし」

蹄は自分の失言に舌を出した。

「ある程度再生が進んだら、また斬ってもらうぞ。正気になられたら、この程度の牢屋は空き部屋も同然だ」

「はいはい」

部屋の外から、ノックの音がした。

「麗春様、おいですか？」

「なんだ？」

「カトラス商会からの使者だという方が、面会を求めています。紅蓮と名乗っていますが、いかがでしょうか」

麗春は舌打ちした。

「奴か。早々に来るとはな」

「どうなさいます」

麗春は溜息をついた。

「カトラス商会を軽視するわけにはいかん。会うが……少々時間がかかる、言っておけ。それでもいいなら会うとな」

「はい。そのように」

役員は頭を下げて戻っていった。

「奴って？ 顔馴染みかい？」

「紅蓮 カトラス商会の創始者の直系の一人だ」

カトラス商会 大陸全土に支店を持つ巨大な会社である。

その特徴は、ゆりかごから棺桶までというほど、幅広い品揃えを

誇っている。魔法技術も取引する品物の一つで、自社開発にも余念がない。

ある意味魔道師ギルドの競争相手でもあるが、ギルドに対する資金提供もし、魔法技術の共同開発を行うこともある。

商社でありながら、各国にも顔が効く。なぜならば、財力、武力など、その実力は軽く一国を超えるからだ。彼らがその気になれば、小国の一つや二つ、日干しにできる。

紅蓮はその中枢を担う一族の一人であった。

「どこからか、例の品物のことを嗅ぎつけてくる奴が多くてな……」

紅蓮は数少ない最初の頃からの追手の一人だ」

麗春は溜息をついた。蹄は別のことに気づいてしまった。

「数少ない？」

「……そう、嗅ぎつけた組織は多い。それこそ一時は雲霞のごとく沸いて出たものだ」

「……聞くの、ものすげー嫌なんだけど……なんで過去形なわけ」

麗春が遠い目をした。

「大抵の組織はすぐ手を引いた。壊滅させられた組織もある……」

「……旦那がやったわけ……」

麗春は少し考えるようだった。改めて言葉を選ぶ。

「そういう組織もあるが……それだけではないな。追いかけている組織同士が潰しあったこともある」

とても嫌なことを聞いてしまった、と蹄は思った。麗春の口ぶり
は、何かを隠している。

「……何を隠してるんだい？ 正直に言ってもらわなきゃ、こっち
が困るぜ」

麗春はもの凄く嫌そうな顔をした。それでも言っておくべきだと
判断したのだろう、重い口を開いた。

「永を追いかけている者も様々だということだ。紅蓮のカトラス商
会と、オードウグ教の神威代理執行官、この二つは特に我々と同じ
時期から追いかけて 担当員が生き残っている数少ない組織だ」

生き残っているという言い方が、凄く嫌だった。それだけ命がけだということだ。

「まあ、その二つは、俺にも納得できるれどねえ」

カトラス商会もオードウグ教も魔法関係には馴染みの顔ぶれだ。特に魔法生物がらみとあつては、オードウグ教は必ず出てくる。

その目的は、抹殺だろう。

行為自体は同じでも、動機となれば個々に違う。久遠自身を欲するもの、技術が欲しいもの、抹殺を企むもの。希望がかち合えば、争いもおきる。ならば追いかけるもの同士の潰しあいも凄まじいものがあつたに違いない。

「蹄、おまえも来い。荒事になるとは思わないが……保険だ」

「はいはい、仰せのままに」

麗春は紅蓮との会談に臨むべく部屋を出た。蹄も後に続き、閉ざされたドアにはすぐに鍵がかけられる。

しかし このとき紅蓮が来なければ 麗春が部屋を出るのがもう少し遅ければ、彼らは望みのものを手にすることができたろう。はだけた永の衣服、腹部の辺りから光が漏れた。縦一直線にそれが広がり 永の腹部から培養球ばいようきゅうが転がり落ちた。

永は腹部の一部を魔法義肢（目や臓器の類も習慣的にそう呼ぶ）で補っていた。その一部を变形させそこに隠していたのであった。

その培養球の中には、人形の魔法生物がいた。灰色の長い髪を水中に広げ、愛らしい少女の姿をしたその背には、透明な蜻蛉の翅がついていた。瞳を閉じたままのそれは目覚めるときを静かに待っていた。目覚めるときはまだ先だ。

今無理にそこから出れば、それは生まれることさえ叶わない。だから静かに眠っている。目覚めるときを夢見ながら。

それでも外の様子がまったく分からないわけではないのだろう。

もし、その培養球の中が液体で満たされていなければ、閉じられた瞳から涙を流しているのが分かっただろう。

それは泣いていた。

愛するものの苦しみを感じ取り、誰にも気づかれずにただ一人静かに泣いていた。

命の重み

「姉さまに言われたの？」

きつぱりと、不思議そうな顔をした久遠は言い切った。

その瞬間、永の頭の中は白紙になった。

麗春からの依頼で久遠に告白したのは本当だ。久遠が永に好意を持っていることに気づいていた麗春が、先のない久遠のため、少しの間だけ、久遠を愛しているふりをして欲しいと、夢を見させてやってくれと、依頼されたのだ。

依頼自体はたいしたことではない。

優しくして、耳に心地よい言葉を並べれば良いだけだ。

場合によっては寢室をとみにすればいい。もつとも、それだけは体に負担がかかるからだろうが、麗春にあらかじめ禁じられている。？裁？の一部がよくやる手だ。

相手の寵愛を得て懐に入り込み、『仕事』をする。

問題は、永がその手の教育を受けていないことだろう。そちらの玄人には及ばないものの、人並みに演技くらいはできるだろうと了承したのだが、初っ端から見切られようとは。

しかし、真実を言うのは不味いだろう。

こうした場合、どうすればいいのか、永は教育を受けてはいないが、貧しい知識を総動員して考えた。

「いいえ、久遠。そうではありません」

「いいのよ、嘘つかなくても。気にしていないから」

久遠は満面の笑顔で言い切った。

……これは、どう判断すべきだろうか？

永は戸惑った。

久遠が不愉快になるとばかり思っていたからだ。

それを宥めることばかり考えていたのに、上機嫌で笑われてしまつたら、この先どうするべきか、永には即座に考えられない。

「永みたいに、綺麗な人と付き合えるなら、経過なんか気にしないわ。姉さまに感謝しなきゃ」

普通、気にするのではないだろうか？

想像を超える事態に、永はなにをしてよいのか分からなくなった。（女心は分からない……修行不足ということか……久遠が喜んでいのなら……依頼は果たせていると思っていんだらうな……）

永はそう判断した。

久遠は瞳を輝かせて、永に言った。

「ねえ、永。抱いて」

それは麗春に禁じられている。正直に告げるべきか、適当にごまかすべきか、永は迷った。どちらの方が、久遠の機嫌を損ねないのだろうか？

もはや永には予測できない。

「抱き上げてつて、言った方が分かりやすかった？」

くすくすと笑う久遠の表情を見れば、わざと間違えるように言ったのだと分かる。

永は安堵した。禁止事項を守れる。

「失礼します」

永は久遠を横抱きに持ち上げた。

久遠は 同じ年頃の少女に比べ、異様に軽かった。

「素敵、素敵。こういう風に、抱き上げてもらうのが、夢だったの」抱き上げられた久遠はご満悦だった。はしゃぐ久遠は先ほど悪戯を仕掛けたとは思えないほど無邪気だった。

久遠はいつも自分の足代わりになる魔法生物の上に座っていた。そのために作られた特別製の魔法生物。丸っこくてふわふわで、魔法を付与してあり、わずかに浮き上がって自走する。

久遠の軟弱な脚は、その軽すぎる体重さえ支えきれない。

久遠の回りには、そうした久遠を助けるための魔法生物がいくつも作られていた。

魔法生物は久遠が生活していくのに必要だった。

間近で永の端正な顔を見た久遠は溜息をついた。

「永は本当に奇麗ね」

他愛のない率直な感想だったのだろうが、永はわずかに顔をこわばらせた。それは本当にわずかで、熟れないものなら永が表情を変えたことさえ気づかなかつただろう。

しかし、久遠はあっさり気づいた。

「奇麗って言われること、嫌いなのか？」

「……使い道がありません」

これだけならば、何の意味がよく分からないだろう。

永は暗殺組織？裁？の人間だ。

生まれはよく分からない。

？裁？の人間が任務のさい、情を通じたときにできた子供か、組織が買ったか、浚ったかした子供なのだろう。組織の人間は大体そうだ。それはたいしたことではない。

永は？裁？によつて育てられ、教育された。子供の頃、？裁？の人間は名前を持たない。育つか分からないからだ。大体、身体的特徴からあだ名がつけられる。

男も女も分け隔てなく、それとは知られずに暗殺者の修行を受けさせられる。最初、それは遊びを模しているので誰も気づかない。様々な知識と修練。その中でゆっくりとふるいにかけられる。

荒事に向いた者。

暗殺の手はずを整える者。

相手を信用させて懐に飛び込んでから仕事をやる者。

里に居つき、仕事に必要な道具を生産する者。

そして 何の役にも立たないと判断された者。

最後の者だけは、他の者の教材にされる。現場に立つ前に、教えられた技の効果を試すのに使われる。人の命を絶つ技術のだ。

やがて一人前とみなされた者だけに名前が与えられる。

永は、飛びぬけて優秀だった。そのため荒事に回されたが、もう少し技量がなかったら、相手に取り入る方に回されただろう。

永の顔を見るたびに指導者たちは溜息をついたものだ。

女に生まれていたら、一人で何人分もの働きをしただろうと。

男でもそういう趣味の者を引つ掛ける役割をするものがあるが、永の腕はそちらに回すのが勿体無いほどのものだった。

そうすると、自然と永の容姿は生かされなくなる。もったいないにもほどがある、とよく言われたものだ。

さいわい永にはすぐ久遠の護衛という仕事 came。手練でなければ困るが、護衛対象を怯えさせても困るといふ依頼だ。

手練でありながら、護衛対象を怯えさせない　この依頼に？裁？は久遠と歳が近く、美貌の永をつけた。腕は間違いない、間違っても警戒させない外見だという理由で　様々な事情で永はここにいます。

「？　それって女の人だったら使い道があるってこと？　そうね

たとえば、目標を悩殺しといて二人つきりでお話がしたいわ、とか呼び出して暗殺するとか、取り入って妾とかになつてじわじわ毒をもって病気に見せかけて暗殺するとか？　永が女の人だったらホイホイひっかかりそうね」

「……」

聡いのも考えものだ、と永は思った。

久遠の言った手口は、？裁？で実際に使われている。とはいえ、少し考えれば誰でもわかることなので、わざわざ口を封じなくともかまわないだろう。

何よりも久遠は最重要護衛対象だ。この程度のことですべてよいはずはない。

「ねえ、この近くにお花がたくさん咲いている場所があるんですけど。行ってみたいわ。きれいな鳥の声も聞こえるそうよ」

「……申し訳ありません、久遠。外出は許可できません。体に障ります。花は私が取つてまいりましょう。鳥も、綺麗な声で鳴くものを手配します」

久遠は悲しそうな顔をした。

「違うわ、永。そういうことではないの」

「……分かっていきます。けれど久遠、私にはそれしかできません」
久遠は笑った。笑いながら、瞳に涙をためている。

「神様は意地悪ね。わたしからいろんな物をとりあげて、代わりに才能だけを与えて……それで帳尻を合わせたつもりなのかしら。わたしはもうすぐくる死を、必死に引き伸ばしているだけ」

久遠の一生はそう長くはない。

魔法薬でもたせてはいるが、じわじわと死の影が忍び寄っている。神は久遠に才能を与えたのかもしれないが、代わりに、ごく普通の幸せをことごとく奪っていった。

「わたしの足は、立つことさえできないのよ。立って外に出る。ただそれだけのことが、わたしには出来ない……悔しい……こんなわたしのどこが恵まれているというの……」

久遠の嘆きを聞きながら 永は無力感に襲われた。

人の命を奪う方法なら、いくらでも知っている。

怪我をしたときや、病の治し方なら、そこいらの医者と同じ程度の知識はある。

それでも 久遠には何もしてやれない。

本職の 永より遥かに優れた医者でさえ久遠の体は治せない。
いつか来るその日を引き伸ばしているだけだ。

自分は何も出来ない 久遠の涙をとめる術も知らない た
だこうして、ささやかな希望を叶えるだけ

あまりにも軽すぎる久遠の重みに、永はただ途方にくれた。

それは夢。過ぎ去った追憶の中るとき。

命の重み（後書き）

す、少しは……甘い空気ありますか？

黒を白に

「これは、これは、麗春さん。このたびは私どものために時間を割いていただき光栄です。ご無沙汰しておりましたが、お元気でしょうか。わたくし、このたびカトラス商会の代表としてまいりました。私どもカトラス商会は、魔術師ギルドとの友好な関係を重視しております。この訪問も、決して魔術師ギルドに仇なすものではないとご理解いただきたいと思っております。わたくし個人としてもその方針は守っているつもりです。麗春さんとも個人的な友誼を結びたいと常々考えておりますしだいで。麗春さんは相変わらずお美しいしかし、若く美しい女性がそのように武装するのは、いかがなものかと。いえ、似合っていないわけではありませんが、麗春さんならば、我がカトラス商会の取り扱っております最高級の絹のドレスこそ、相応しいかと。後で贈らせていただきます。貴女のように美しい方が着飾らないなど、以ての外です。まして、そのように美しい髪を切ってしまうなど、犯罪にも等しい行為ですとも。よろしければ、鬘かまちなども贈りましょう。もちろん、飾りの細工物や靴などの小物も最高級のもを贈らせていただきます。よろしければ、流行の形に結い上げてみませんか？ 貴女には最高級の装いこそ相応しい。その後はよろしければ、食事などに招待させていただきたく存じます」

「話の途中ですまないが」

「何でしょう」

たとえ話の腰を折られても、紅蓮の愛想は全開だった。特上の笑顔で麗春に問い返す。

「この社交辞令はいつ終わるんだ？」

「麗春さん……」

さすがに少し寂しそうな顔をした紅蓮だった。

会見には支部の一室が使われた。麗春が椅子に座ったとたん、紅

蓮の長話が始まったのだが、これも挨拶のひとつと麗春は割り切っていた。ほうっておくと、いつ本題に入るのか、見当がつかない。交渉にしろ、商人である相手のペースに乗せられるのは、不利だと経験で分かっている。

「わたしも忙しい。さっさと本題に入ってもらいたい」

取り付く島もない麗春の様子に、紅蓮は一度咳払いをした。しかし、営業用の笑顔に曇りはない。さすがの商売人根性である。

「この度はめでたく望みのものを手に入れられたとか。おめでとうございます」

「知らないな、何のことだ」

「貴女が二年も追いかけていたものです。我々も欲しかったのですが、貴女の手に移ったのなら、しかたありません」

「わたしは何も手にしていない。どの間者だ、そんなデマを流したのは。いったい、カトラス商会はどれだけの間者を魔道師ギルドに入り込ませている？」

この問いに紅蓮は全開の笑みで答えた。

「魔道師ギルドがカトラス商会に忍び込ませたのと同じくらいだと思います」

「では、一人もいないな」

「さようです」

相手の言葉が真つ赤な嘘だと知り尽くした、いかにも空々しく、寒い一幕であった。

「我がカトラス商会は、魔道師ギルドが進めるであろうプロジェクトに出資したいと思っております。つきましては、その権利についてご相談いたしたく」

「プロジェクトとは、どの計画のことだ？ 魔道師ギルドでは常にいくつもの計画が同時進行している」

カトラス商会が魔道師ギルドに出資することはよくある。そうして開発された技術はカトラス商会にも権利があり、共同開発技術としてカトラス商会も扱うことが許される。

「これは失礼いたしました。我々が出資いたしたいのは、不老不死の研究です」

「魔道師ギルドではそのような計画はされていない。デマだろう」

「では 魔法生物に意識を移し変える技術 といえば、お分かりになりますか？」

さすがに麗春は眉一つ動かさなかったが、反応が遅れた。

「そんな技術があるとでも？ わたしも初耳だ」

「おとぼけにならなくとも、けっこうです。わたくしもこれが、あの、久遠の研究でなければ、一笑にふしていたことでしょう。けれど あの久遠なら 魔法力の補給が面倒だという理由で、魔法生物に内臓するためそれまで巨大な部屋ひとつ分もの大きさであった魔法動力発生器を、掌に乗るほど軽量小型化し それまで形が同じで動けばいいという程度だった魔法義肢を感覚まで伝えるほど進歩させ、臓器や器官の完全なる代用品まで造り上げ 空を飛んだりできたなら楽しそうだという動機で、魔法生物の生体部分に魔法を付与するなどという それまで誰も夢想すらしなかった技術を作り出した奇跡の天才久遠、貴女の妹君ならば、不可能も可能にしたとしてもおかしくありません」

紅蓮は舞台俳優のように朗々と語りかけた。それはカトラス商会が永を追いかける理由でもある。

「麗春さん、貴女は若く美しく、才能に溢れていらっしやる。久遠の名で発表されたものも、あなたという優秀な助手 いえ、共同研究者がいなければ今の半分も無かったです。疑問の余地もないほど、すばらしい方です。ですが、この世の中でどれだけの人間が自分に満足しているか分かりますか。いつまでも、若くありたいもつと美しくなりたい。遅しくなりたい。人の欲は限りがありません。どんな。わたくしどもは、そのような方を顧客に持っております。どのような体でも思いのままとあれば、どれだけの方がそれを望むのか 魔法義肢のように体質で使えない方がいるとしても、かなりの需要が見込めます」

魔法生物に意識を移せる 即ち理想の体を作り、そこに意識を移せるとなったら、自分の体に不満を持っている人間はそれを望むだろう。

カトラス商会が求めていたのは、その技術だった。丸ごと手にするのが無理ならば、少しでも権利に食い込もうとする。

だが、そうなるかと魔道師ギルドでも散々議論されたある問題が浮上する。

「だが、それは人といえるのか？」

魔道師ギルドでは、それを人間として認めなかった。人間を原料とした魔法生物として認知したのだ。そして人間を原料とした魔法生物は人道的にあつてはならないものとして極秘事項とされた。？ 久遠？を必要としながらだ。

「それを決めるのは、貴女ではありません」

紅蓮は初めて狡猾な素顔を垣間見せた。

麗春は軽く眉をひそめた。なぜ、永に言われたことを、この男に言われなければならないのかと。

「わたくしどもの顧客には黒を白といえる権力者が何人もおられます。あの方々が人だと言えば、人になります。真実はどうでもよろしい。世間に認知させればよいのです」

王侯貴族を顧客に持つカトラス商会だからこそ、言えることだった。確かに、カトラス商会が働きかければ、魔道師ギルドの決定さえ覆せるだろう。

「なるほど だが、魔道師ギルドはそのような研究をする予定は今の所ない」

「さようですか ですが、覚えておいてください。我々カトラス商会はそのプロジェクトにいつでも出資いたします」

「そうか、そういえば由々しき噂を聞いた」

「何でしょう？」

「カトラス商会の者が、ある人物が持っていたものを欲しがり、取引を持ちかけた。ところが件の人物がどうあつても取引に応じない。

そこで力づくでその品物を取りあげようとしているというのだ。デマか？」

「デマです」

紅蓮は即座に笑顔で応じた。

「商売は信用が第一です。力づくなど、商売とは言えません」

その力づくをすでに何度も実行している身で、飄々と言い切る。

どこまでも面の皮の厚い、と麗春は心の中で罵った。

「それは結構。取引相手がいきなり強盗に早代わりするのでは、恐ろしくて商売をしようという気も起きなくなるからな。真実ならば

真実だと錯覚されればカトラス商会の致命傷ともなりうる悪い噂だ。デマだと確認できて嬉しいよ」

「その通りです。そのような噂は商売敵が流したのでしょ」

どこまでも白々しい嘘を爽やかに言い切る紅蓮だった。

(この、ど狸が)

麗春は心の中で紅蓮を罵ったが、表面上は穏やかに会話を終えた。会話を終えると、すぐさま別の用件が入った。

部屋を出たとたん、支部員の一人が耳打ちした。

「オードウグ教のフランチス枢機卿が、通信での会話を求めています」

麗春は舌打ちした。

「いったいどれだけの間者がいるんだ、どこもかしこも、情報が早すぎる！」

「やっぱ、内通者がいるわけ？」

「当然だ。この件だけではなく、大きな組織は互いを見張りあっているようなものだ。間者に気づかれぬように何かするのは、大変だ。その情報も正確とは言いがたいときもある」

蹄は肩をすくめた。

「お偉いさんも、大変だねえ。なんだい、あの紅蓮ってのは。お喋りにもほどがあるぜ。男のお喋りは嫌われるつてのに なに？」

蹄は自分をじっと見詰める麗春の視線に気がついた。

「　　そうか　　誰かに似ていると思ったが、アレか」

麗春は一人で納得していた。頷くと、蹄に背を向け通信室に向かった。

「ええ、お嬢さん、俺みたいがいい男が、そういるわけないでしょ。誰に似てるっていうんだい？　ねえ、てば、ねえ、聞いてる？」

黒を白に（後書き）

カトラス商会側の追いかける理由でした。お喋りが二人。誰と誰とは言いませんが。

神の意にそわぬもの

気がつくくと全ての苦痛は消えていた。目の前には透明の培養球が転がっている。

「久遠！」

永は培養球を拾い上げた。

なにが起きたのか、永には分かった。久遠が永の苦痛を沈静させ、魔法義肢の再生を促す魔法を使ったのだ。

「……また……目覚めるのが遅れる……」

永が久遠の復活を信じるのには、眠っているはずの久遠がときおり手助けをしてくれるのが原因だった。久遠としての意識がなければ、こんなことはしない。

しかし、それは同時に安定させるための魔力を別の方に使うということであり、そのたび久遠の目覚めは少しばかり遅れる。

「久遠……すまない」

永は培養球を抱きしめた。

久遠は応えず、培養液の中で浮かんでいる。ただ、その口元にはわずかに笑みが浮かんでいた。

「神の御心に反するものを引き渡していただきたい」

「唐突だな、枢機卿。おまけに意味不明だ」

枢機卿と麗春は通信映像を介して、話し合っていた。魔法による通信で、麗春の前には豪華な椅子に腰掛けたフランチス枢機卿の立体映像がある。ずいぶん離れているようで、時々映像が乱れては再び映像を結ぶ。

フランチス枢機卿は聖職者というよりは、軍人といわれた方が納得できるような逞しい体躯の持ち主だ。端正な顔は厳しく引き締められ、鷹のような目と、鷲鼻が、慈悲よりは、厳しくとがめる表情がよく似合う。

なにを間違つて聖職者になどなったものかと、麗春などは思うのだが、枢機卿に上り詰めた所を思うと、案外聖職というのにも、軍隊と通じる部分があるのかもしれない。

フランチスの方にも同じように麗春が映されているだろう。

蹄は映らない所に密かに控えている。

通信を開始すると同時に、枢機卿が開口一番言い放ったのが、引渡し要求であつた。

「魔法生物のことだ！」

「気は確かか、枢機卿？ まさか、魔道師ギルドの所有する、魔法生物全てを引き渡せとでも？ そんな無茶が通ると思つているのかな？」

麗春は涼しい顔で言い切つた。枢機卿が何をさして『神の御心に反するもの』というのか分かりきつていたが、知らぬふりをするほうが賢いやり方だ。

「言つておくが、そのような無茶は通らない。ギルドの所有する魔法生物は莫大な数だし、注文で造つている品物もある。どう購うつもりだ？ 金だけでは無理だぞ。依頼主との兼ね合いもある。まさかとは思つが、無償でよこせなどという寝ぼけたことを言つているのではあるまいな、魔道師ギルドと、得意先の権力者、全てを敵に回すつもりか？」

立派な恫喝であつた。麗春でもこの程度の脅しはやる。

「人が変じた魔法生物のことだ！」

「人が魔法生物になる？ 失礼だが枢機卿、お気は確かか？ それとも、その歳でボケたか？ そんなことがあるはずがない」

「とぼけているのは、そちらだろうが！ 久遠だ！ あの、悪魔の天才が造り上げた、魔法生物を引き渡すがいい！ 人間は神に創られ、魔法を使うことを許された」

「 神は鳥に飛ぶことを許し、魚に泳ぐことを許した。

そして人は神より魔法の力を使うことを許された。

人の子よ。この力はそのままで何も出来ない。研究し、研鑽し

なさい。この力はやがて全ての生き物に許したものと同じことができる。

しかし人の子よ。忘れてはならない。命を生み出すことは、神にだけ許された業である。オードウグ教の教えの一節だったな」

麗春は、もしこれが教女の説法であつたのなら、信者が増えるだろうと思われるほど美しい声で一節を唱えた。

「さよう。我が教団の教えを諳んじておられるようだ。ならば、分かるだろう。神に愛されし人間を、神の意に反する魔法生物に変える技術など、あつてはならないのだ！」

「繰り返すが、フランチス枢機卿、人間が魔法生物になることなどありえない。人と見誤る魔法生物もな。そもそも、魔法生物が知性と呼べるほどの知能を持っていないことをご存知か？」

「な……に？」

フランチス枢機卿の顔が呆けた。

「その様子なら、ご存じなかつたようだな。魔法生物は、生体を維持させるための条件付けはできるし、ある程度の命令も教えられる。しかし 知性 とくに人間に匹敵させるような人格 思考能力とでも呼ぼうか？ それがない。単純な思考はあるが、人間に匹敵するほどのものは誰にも造れない。枢機卿はなにか勘違いをなさつておられるようだ、人と間違えるほど思考力のある魔法生物は存在しないのだ。どこの誰に吹き込まれたのかは知らないが、存在しないものを渡せといわれても困るな。もう一度情報を吟味されることをお勧めする」

「思考……力ががない？ ……本当か？」

「わたしを疑うのかな？」

久遠なき今、魔道師ギルドの魔法生物の権威は麗春である。魔法生物を嫌うあまり、魔法生物について調べようとしなかつた枢機卿が意義を唱えられるはずがない。

「ならばカトラス商会に訊ねてみるがいい。商品については詳しく教えてくれるはずだ。そちらも何かと付き合いがあるはずだ」

カトラス商会に訊ねても同じことを言うと、自信たっぷり麗春は嘲笑した。

自分の半分も生きていない小娘にやり込められ、枢機卿は満面に朱を注いだ。

麗春は冷笑を浮かべて話題を変えた。

「そういえば、オードウグ教について、由々しき噂を耳にした」

「我が教団にですか？」

「教区でもない所で、教徒でもない人間を、魔法生物を所持しているという理由で追い回しているというものだ」

ひくつとフランチスの顔が引きつった。紅蓮に比べれば、実に分かりやすい。

「どこでそのような根も葉もない噂を……事実無根ですな」

「それはよかった。魔道師ギルドには魔法生物の所有者も多いし、魔法生物の所有者は王侯貴族に豪族、権力者ばかりだ。もし、それが事実なら、彼らも黙っていないだろう。明日は我が身と思えば、オードウグ教に対して圧力をかけてくるぞ。宗教弾圧を受けかねない。オードウグ教もそんなものを敵に回したくはないだろう」

わなわなとフランチスが震えた。

「そういえば、魔道師ギルドの噂も聞きましたぞ」

「どのような？」

「人に渡した魔法生物が、出来がよかったので返せと追い掛け回している」

「それは、なんとも不名誉な噂だな」

麗春は鼻で笑った。

逆襲のつもりなのだろうが、あまりにも稚拙だ。

「用件はそれだけか？ 私も暇ではないのだが？」

「よかるう、そちらがその気なら、こちらにも考えがある」

枢機卿は一方的に怒鳴って通信を切った。

「せわしい奴だ 何を笑っている？」

部屋の一角で蹄が声を殺しながら笑っていた。腹を抱えて、苦し

そうにのた打ち回る。

「ひっひっ、ひい、可笑しいっ！ 最高っ！ あんたらが、永に下手に手を出さないのは、そういう理由かい」

麗春は不機嫌な顔をした。

蹄の指摘が的を射ていたからだ。

永一人を追い詰めるためならば、どの組織もあらゆる手を使つただろう。しかし、各組織が睨み合っている現状では、あからさまに永を追いかけることが出来ない。

一つの組織があらぬ疑いをかけて追い回そうとすれば、別の組織がそれを暴いて社会的信用を地に貶める。

そんなことが何度もあつたのだ。

おかげでどの組織も表立っては永を追いかけられない。

「痛いことを言ってくれる。しかし、我々はいわば詐術に引っかかったのだ」

「詐術というと？」

「死期が近づいたと悟つた久遠は、永と二人きりになることを望んだ。我々は久遠の最後の頼みと思ひ許可した。久遠と永は生活の手助けをする魔法生物とともにある場所に移り住んだ。そして二ヶ月後、永から久遠が死んだと連絡があつた。遺言に従い、その遺体は処理したので渡せない。我々はそれを信用した。そして、久遠の遺言の一部に、今までの礼として、久遠の遺産の一部と、培養中の魔法生物を永に譲るとあつた。我々はそれを久遠の遺志と思ひ履行した」

「それが問題の魔法生物かい？」

「そうだ。そして私が久遠の遺品を整理していたとき、その魔法生物に関する資料が出てきた。最初は信じられなかった。久遠があの子が自分を造り変えていようとは、永が遺体を渡せなかつたはずだ。久遠は自分の体そのものを徹底的に作り変えて生きながらえようとしていたのだ」

「そして成功したのか？」

麗春は苦渋に満ちた表情をした。

「まだ分かん。本当に生体が安定できるのか。再生されたそれが、久遠の人格を備えているのか。だからこそ、我々はそれを取り返そうとしている」

「取り返して、どうするんだい？ その魔法生物が久遠としての人格を持っていたら、魔道師ギルドはそれを久遠として認めるのかい？」

資料に基づき、魔道師ギルドは問題のものを　そこまで肉体改造をしたものを　人として認めるのか、極秘裏に会議を行っていた。結論は、否。

「無理だな。魔道師ギルドはそれをすでに魔法生物だと認定した」「自分達の都合のため、だろう？」

蹄が喉で笑った。

「　　どういう意味だ？」

「分かってるくせに。それが魔法生物なら、今後どんな発明をしても、権利を主張できない。どんなにこき使おうと、苦情も無視できる　　そういうことだろ？　だから、誰かさんは、逃げてんじゃね

いの？」

「……」

麗春は反論できなかった。その可能性は確かにある　　もしも、魔法生物が久遠そのものであれば魔道師ギルドは　　通信室のドアが乱暴に開けられた。

「大変です！　永が逃げました！」

「何だと！　そんな馬鹿な！　まだ、再生は終わらないはずだ！」

「どうしやす？」

やる気のない蹄の言葉に、麗春の怒号が答えた。

「どうも、こうもない！　蹄、永を捕らえろ！」

投げやりに蹄が答えた。

「はいはい。行くことは行きますがね、こっちの得物は知られてるし、取り逃がすことも考えておいてくださいよ」

「うむ、危険手当と、捕獲した際は特別ボーナスを出すように経理に言っておく」

「……お嬢さん……金の問題じゃ、ないんだけどねえ……」
蹄は肩をすくめた。言っても無駄だと悟ったからだ。

神の意にそわぬもの（後書き）

宗教って難しい……医学が絡むともっと難しい問題いっぱいです。

百鬼夜行

すでに闇がその慈悲深い手で世界を被っていた。魔道師ギルドでは密かに永の追跡が行われていたが、それは人目を憚るものであり、あまり人手が出せない。

ことは隠密に行われなければならない。

それをいいことに夜陰に紛れ、永は屋根の上を密かに駆けていた。密集した建物の上ならば、ある程度の穩業を修めたものならばそこを道として使える。

真つ当な人間ならば道や家屋の中には気を使うが、屋根の上まではそうは気がつかない。

音もなく疾走していた永は、微かな音と煌きを捉えた。横跳びにそれをかわす。

屋根の一部が、キンという甲高い音とともに切られた。

「あれま、やつぱ二度目はかわすかい」

いつの間にか追いついていたのは蹄だった。

「その眼、特別製かい？ 俺の鋼系が見えるのかい？」

永の左の目はいつの間にか色を変えていた。永の眼は深い藍色だが、左の眼はいつの間にか赦光を放っていた。

「まあいいや、やるだけやってみようか？」

蹄の指先が繊細に動いた。

ほとんどやる気のない口調とは裏腹に、蹄が繰り出す攻撃に永は戦慄した。

蹄が操る鋼系は一本ではなかった。全部で十本。それだけでも脅威だというのに、一本につき一つの攻撃ではない。うねりくねり螺旋を描き、一本が複数の攻撃を行う。前後左右、あらゆる角度から無数の攻撃が来る。真つ向勝負は遠慮したいとは、戯言もいいたころだ。まさしく神技といえるほど、蹄の技量は凄まじい。

しかし、それを迎え撃つのは一振りの剣。攻撃する側が神技な

ら 迎え撃つ方もまた神技。

角度一つ間違えば、剣を絡め取られるというのに、それを全て弾き返す。

たとえ眼が特別製の義眼で、鋼糸が見えているのだとしても、あまりにも凄まじい。

弾き返された糸が、無関係の建物を切り刻んだ。屋根材が、煙突が、断ち切られ、深い切れ目を入れられる。

「一度に十本だと……化け物め！」

「なんで、あたらねえんだよ！ 化け物かよ！」

期せず同時に同じ言葉で相手を罵っていた。

蹄の攻撃に永は足を止めざるを得なかった。走りながらかわせる攻撃ではない。

蹄もまた、死力を振り絞られずにはいらなかった。少しでも攻撃が緩めば、剣の一撃が来る。足を止めるには、攻撃の数は減らせられない。

回りの建物が削り取られるように、被害をこうむる。

永遠に続くのではないかと思われた攻防は、眩しいまでの輝きとけたたましい笑い声中で中断させられた。

「うわっ！ はははははは、ついに見つけたぞ、永！ いざ、尋常に勝負せい！」

それは、魔法光に包まれた鎧を着込んだ巨漢だった。

純白のそれは胸に刻まれた紋章を見るまでもなく材質で、聖衣と同じ性質ではないかと予測できるのだが、あまりにも大きく重そうだった。

その背に背負われているのは、スイカほどの大きさの、オードウグ教製の魔法動力発生装置ではないだろうか。魔道師ギルドでは掌に乗るほどコンパクトかつ無音だが、オードウグ教ではこの大きさが小型化の限界だった。稼動音があたりに響き渡る。

手にする巨大な矛も、ただの矛ではない。けたたましい音を立てている。

後光と稼動音に加えて本人自体が騒々しく高笑いをする、これほど隠密という言葉を徹底的に踏みこむにじる登場もないだろう。

二人の暗殺者はしばし呆然とした。

隠密を常とする彼らには、想像を絶する光景だった。

もともと傷ついていた屋根材が、その重みに耐えかねて砕けていく。

少なくとも、屋根の上にはあまりにも不似合いな姿だ。

「な……なんだ……ありゃあ……」

呆れたように呻いた蹄は攻撃を忘れていた。

永は苦虫を噛み殺したような顔をして呻いた。

「爆裂宣教師……」

「友達かい？ 相手は選べよ」

「誰がだ！」

永は珍しくも怒鳴った。

「うわっーはははははは！ 永よ、魔道師ギルドから自力で脱出するとは、たいしたものよ。しかあし、この神威代理執行官ランバトルが来たからには、そなたも、神の意に反するものを作り上げた魔女も最後と知れ！」

蹄が無邪気に微笑んだ。

「悪いけど、邪魔なんだよね。おっさん、どっか逝って？」

ギンっという耳障りな音がした。

「うおう！」

ランバトルが驚愕の声を上げ 蹄が眼を剥いた。

「き、斬れねえ！」

ランバトルの全身を鋼糸が戒めたが、蹄の鋼糸をもつてしても、ランバトルの鎧は斬れなかった。

プロテクター部分の素材は仕方ないとしても、その稼動部 肘や膝などの完全に被えない部分 さえ斬れない。通常の聖衣なら、そこから斬ることができるが、ランバトルの聖衣は斬れなかった。

よくよく見れば、薄い魔法光の輝きが鋼糸をくいとめていること

に気づいただろう。

蹄は慌てて鋼糸を解いた。そうしなければ、軽量の蹄の方が鋼糸に引き摺られる。

ランバトルが初めて蹄に顔を向けた。顔は兜で覆われ見えないが、激怒していることは、雰囲気に分かる。

「むう！ 今のはそなたの仕業か！」

ランバトルにしてみれば、体の自由を奪われた程度のことだが、実は殺されかけたという自覚はない。

「おおかた、魔道師ギルドの手の者であろうが、永との勝負を邪魔するのであれば、まずそなたから片付けてくれるわ！」

ランバトルは蹄に襲いかかった。

矛の一撃を大きく跳んでかわした蹄だが、その身代わりに屋根が轟音を上げて崩れた。

ランバトルの矛は高速振動することで破壊力を増す特別製のらしい。まさに、爆裂という名に相応しい破壊力である。

「おのれ！ ちょこまかと！」

爆裂宣教師は見るからに重量武器である矛を軽々と操り、蹄を攻撃するのだが、そんな大降りの攻撃を食らう蹄ではない。

ひよいひよいとかわすのだが、その度、足場になっていた建物が破壊された。

もともと永と蹄の戦いの巻き添えを食って、切れ目を入れられていた部分もある。爆裂宣教師の攻撃に耐えられるはずもなく、崩壊していく。災難なのは、無関係の中の人間だ。

蹄は足場を変えつつ、呆れた。

「なんつー防御力と破壊力……」

どれほどの破壊力もあたらなければ意味がない。爆裂宣教師の攻撃は蹄には脅威ではないが、避ける事の出来ない建物には被害甚大だ。

乗り移る建物、乗り移る建物、全てを破壊しつつ爆裂宣教師は轟進する。このままではどれだけだけの被害が出るものか、計り知れない。

街そのものが崩壊してもおかしくない。

たった一人の人間にそんなことができるとは思ってもみなかったが、目の前の男なら出来そうだな。というか、現在進行形でそうなりつつある。

(もう人間じゃねーな、こいつ)

自分のことを遥かな棚の上に置いてそう思う蹄だった。

かといって、鋼糸が通じなければ、糸使いになす術はない。永の剣とてあれを斬れるかどうか。その証拠に斬りかかっていない。

「歩く迷惑……」

蹄は思わず呟いた。

「おのれえええ！ 猪口才な！ そこを動くなあああ！」

爆裂宣教師が矛を大きく振りかぶり その懐に永が飛び込んだ。糸使いを追い回すことに夢中になっていた爆裂宣教師は無音の暗殺者たる永の存在を忘れていたのだ。矛を振り下ろそうとするその腕を掴み、爆裂宣教師の力を利用して、魔法義肢の暗殺者はそれを投げ飛ばした。

足元の屋根材が重みで砕けている所を見ると、かなりの重量のはずだ。

投げ飛ばされた爆裂宣教師は、自重で屋根材を砕き 落ちる

悲鳴と轟音がした。悲鳴はランバトルのものではなかったから、住人のものだろう。二度目の轟音は、二階の床を突き破ってさらに下に落ちたものか。

瘦身に見える永だが、力技も得意らしい。斬れなければ、衝撃をというわけだ。

「最後まで騒々しい奴……」

この高さから落ちたのだ。自重を考えると、聖衣はもっても、生身の方が耐えられないだろう、と蹄は考えた。

しかし、永は背を向けて逃げ出そうとしていた。

「旦那、逃がさないよ。邪魔者は消えたし、ゆっくりと」

「あの程度で奴がどうにかなるなら、苦労はしない！」

永が吐きすてるように言ったのに応えるかのごとく、騒々しい笑い声が響いた。

「うわっーはははははは！ さすが永！ 某を投げ飛ばすとは、たいしたものよ！」

件の爆裂宣教師が自分のあけた穴から這い出してきたのを見て、蹄は呆れかえった。

なんとという頑丈さ。死なないまでも、気を失うか怪我ぐらいする衝撃であつたはずだ。

「に……人間じゃねえ……化け物かよ、あんたは……」

「神の御加護だ！」

きつぱりと爆裂宣教師は言い切った。

その隙に永は走り出していた。

「待てえええ！ 某と勝負いたせ！」

怒号とともに、爆裂宣教師が信じられぬ速さで走り始めた。後光にも見える魔法光が作用しているのか、その体はわずかに浮いている。永と爆裂宣教師の間に蹄がいた。蹄など眼にも入らぬように、爆裂宣教師は辺りを破壊しながら進む。

ひとつのことに夢中になると、そのほかのことは目に入らなくなるらしい。このままでは轢かれる。

「やってられるかああああ！」

キン、という甲高い音とともに、聖衣と魔法動力発生装置を繋ぐ連結部分が断ち切られた。唯一魔法光に覆われていなかったそれが断ち切られたとたん、爆裂宣教師は失速し 落ちた。屋根と床をいくつかぶち抜きながら落ちていく轟音がした。

おそらくは、いくら魔法で軽量化されていたのだろう。動力がなくなったとたん、もとの重量に戻ったのだろう。蹄は爆裂宣教師があけた穴を覗き込んだ。

「か……片付いたか？……」

さすがに今度は這い上がってこなかった。仕留めたかどうか分らないが、一時的にでも戦闘不能にしたのだろう。しかしそのあいだ

に永も見失っていた。蹄は安堵と疲労感から体中の力が抜けてへたり込んだ。

とりあえず今は安全だ。

「何なんだよ、こいつは……ひでえ冗談だぜ……まったくよ」

永の再生が予想以上の速さで終わったこと。一本の剣で自分の攻撃を凌ぎきるほどの、化け物並みの技量。おまけの爆裂宣教師とやら。全てが悪い冗談だと思いたい出来事だった。化け物の敵も化け物だ、とその二人を相手にした自分のことをはるかかなたの棚に放り上げて思った。

「お嬢さんにどやされるかねえ」

蹄は情けない顔をして肩をすくめた。

百鬼夜行（後書き）

どいつもこいつも一般人からみたら立派な……ですよ？

裏と表

「奴の名前はランバトル 神威代理執行局の牙 爆裂宣教師の異名を持つ男だ。魔法薬にもっとも適応した個体だと聞いている」

「んな、化け物がいるとは聞いてないぜ」

「私も言っていない……奴とであって無傷とはたいしたものだな、蹄」

麗春の説明に蹄は無然とした。

魔法薬はオードウグ教のもっとも得意とする分野だ。神威代理執行官の一部は魔法薬で肉体を強化しているという。その最高峰が、アレらしい。

「オードウグ教のフランチス枢機卿は自ら動けないが、代わりに奴が動く。頭が枢機卿で奴は手足といった所だ。奴と永の戦闘のとはつちりを食って壊滅した街は一つや二つではすまん」

蹄の脳裏に昨夜の様子が浮かんだ。なるほどあの戦闘力では無理もない。おまけに巻き添えもお構い無しでは回りの被害は酷いものになるだろう。

肩をすくめて頭を振る。

「化け物だね。追う方も、追われるほうも」

「うむ。永も最初は倒そうとしていたらしいのだが、何せ刃物は通らん。そこで衝撃を与えて中身の方をどうにかしようとしたようだが、本人も頑丈でな。本人達はピンピンしているのに街だけが壊滅するという事態がしばらく続いた。さすがに最近では仕留めるのは諦めて逃走しているようだ。おかげで被害が少なくなった」

あれで少なくなったとは、ひでえ冗談だ、と蹄は思った。

公式には、局所的な竜巻が発生して加羅伊の街の一部が被害にあったということになっているが、あれを人間がやったなどと誰が信じるだろう。

「奴が出てきたのでは、見失うのも仕方ない。惜しかったな。残念

ながらボーナスは出せないが、危険手当は出すように経理に言っておこう」

「そりゃ、どーも」

よっぽど金の問題ではないと言いたかった蹄だが、言っても無駄だと悟り、言葉を飲み込んだ。

麗春は報告書を眺めて、何事か考えている。その眼に異様な光を感じて、蹄は嫌な予感がした。

「奴を行動不能にしたのは本当か？」

「ん、這い上がってこなかったから、そういう事じゃないのかな？ 俺の報告書になんか不備でも？」

麗春は不気味に眼を光らせている。

蹄は思わず身を引いた。

「永に続いてランバトルをも戦闘不能にするとはな……奥の手は出していないかったが、それでもたいしたものだ……」

「アレでまだ奥の手があるのかい……」

桑原、桑原と心の中で唱える蹄であった。

「我々は永を追いかけるのに、資源、財力を惜しみなくつき込んできたつもりだが、どうしても劣るものがあつた……人材だ。永に勝ると劣らぬ戦闘力を持つ者……オードウグ教にはランバトルがいたが、それ以外の組織は人材に恵まれず、質を数で補おうとしてきたが……我々はそれを得たと思つていいのかな？」

「……お嬢………さん………」

思わず声も引きつる蹄だった。

「俺があいつらの相手をするのかい？ あの化け物達を？」

麗春は頷いた。蹄は力いっぱい訴えた。

「お嬢さん！ あんな化け物と一緒にしないでくれる？ 俺は薬物強化も魔法義肢も使つてない、まっさらな普通の人間なんだぜ」

「安心しろ。その二人に技量だけで対抗できるのは、我々から見たら立派に化け物だ」

むしろ、魔法義肢も使わず薬物強化もされていないものが、一時

的にはいえあの『化け物ども』を無力化できたということが恐ろしい。

化け物確定。

「……………おじよおさぁん……………」

声まで泣きそうな蹄であった。

「とはいえ、しばらくは動くな。奴と鉢合わせしたら面倒だ。奴も大人しくはしているだろうが……………街にはオードウグ教の教団員が溢れているからな」

局部的な竜巻の被害にあった　とされている　加羅伊の街には、まるでこの事を予測していたかのように、食料、医薬品、資材を持ち込んでいた神威代理執行局が、人為的会見により無料援助していた。

なにがあつたか知っているのは一部の執行員だけだろう。何も知らずに教団員は心を込めて怪我人の手当てをし、炊き出しを行い、街の復興を手伝っている。

もちろん、魔道師ギルドからも援助は出ている。

恩は売れるときに売っておくものだ。

援助を受けた加羅伊の住人は、教団やギルドの厚意に感謝するだろう。

何があつたか知っている当事者の蹄としては寒い限りだ。

「自分達で壊しといて恩を売るなんざ、阿漕もいいところだぜ」

「それが政治というものだ」

「はいはい。俺はここで大人しくしてるけどさ、あいつ等はどうすると思う?」

街は混乱を極めている。それにまぎれて遠くに逃げられたら捕まえられる。

「永はしばらく体を休めているだろう。今日、明日くらいはな。再生は体に負担がかかる。爆裂宣教師の方も、人目をはばかるだろう。教会で掃除をするか、本部に収まっているだろうさ」

義肢を再生させるには激痛に耐えなければならぬ。永といえど

も消耗する。その直後に逃走をはかり、蹄とランバトルの相手をしたのだ、かなり疲労しているだろう。

しかし蹄は別のことが気になったようだった。

「掃除？」

「辻説法と掃除が奴の趣味だ」

蹄は思いつきり顔をしかめた。

「……………なんの冗談だい、それは」

「奴は敬虔なオードウグ信者だぞ」

くすくすと麗春が笑った。蹄は肩をすくめた。

「狂信者だろ？」

「そつとも言つな」

裏と表（後書き）

蹄、普通の人間の主張、叩き潰しましたね、麗春さん……まあ、無理もないです。化け物確定で。

でも人間です。

死神は語る

加羅伊の街は混乱していた。

昨夜なんの前触れもなく発生した竜巻は、街の一部を倒壊させた。

「本当なんだよ！　なんか光つてて、高笑いが聞こえたんだ！」

教女達は顔を見合わせた。

「あれはきつとばけもんだ！　加羅伊は悪魔に魅入られちゃったんだ！」

家が崩壊したという男はその直前に光り輝くなにかが高笑いしていたと繰り返す。

甲高い音を何度も聞いたという証言やら、人の言い争う声や高笑いを聞いたという証言もあるが、風の音を聞きまちがえたのである。

輝く物体が飛んでいるのを見たという証言もあるが、プラズマである。

「泊まれるところがありますか？　なければ急ごしらえですが、こちらに休めるところがありますわ」

「ささ、休みましょう。こんなひどい目にあつたのですもの、気が高ぶっているんですわ。気持ちを落ち着けるお薬を持ってまいりますわ」

慈愛溢れる教女達は心配そうに男を仮説住宅に導いていった。

唯一の救いは死者が出なかつたということだが、建物の被害は深刻であつた。

幸いなことに、魔道師ギルドやオードウグ教、カトラス商会などが街の復興に全面的な協力をしてくれていた。

オードウグ教などは、まるでこの事態があることを予測していたかのように、神威代理執行局が、事前に大量の物資を運び込んだことが助けになった。

神威代理執行局は万が一を考えて、このくらいの備えを常にして

いるらしい。

家が倒壊してしまった人達は大いに感謝した。

建物の修復、炊き出し、住むところを失った人々の仮設住宅作りと、被災地にはオードウグ教の教団員、魔道師ギルドの職員、カトラス商会の職員などが溢れかえっている。

オードウグ教の教女が被災者を励ましながら食事を差し入れていた。建物を修復しているのは、魔道師ギルドの構成員だ。事情を知らない一般の者は、まさに善意から働いているのだろうが、上層部は自分達で壊しておいて、さも善意ですといわんばかりに恩を売る。

（ 蹄の言葉ではないが 偽善だな ）

麗春はごった返す人波を避けて街のはずれまで行った。

そこは小さな林になっていた。麗春は立ち木を背にして腰掛けた。辺りに人はおらず、麗春は溜息をついた。

麗春は 永を追いかけたくなかった。永が久遠の護衛をしている頃、永の手並みは何度も見た。

さすがに久遠の暗殺ともなれば、狙う相手も手練を送り込んでくる。密かに魔道師ギルドの内部に入り込んでいた。他の護衛は役に立たず、殺害されるか、曲者が入り込んでいることにすら気づかない有様だ。

それを永は一人で撃退していた。

久遠が寝ているその部屋で、久遠を起こすことなく、五人もの手練を倒したことさえある。さすがに永も無傷ではなかったが、血塗れになりながらも、久遠を守りきったその姿に畏怖さえ覚えたものだ。

どうやら暗殺者というものは、独自の進入路というものを知っているらしく、何度も進入されたほかの護衛は、永に何度もそれを教えろと迫ったが、永は頑として口を割らなかつた。

組織 ? 裁? の掟だつたのだろう。

麗春から見れば、永も蹄も、ランバトルも同じ人間とは思えない。魔道師ギルドという後ろ盾があるからこそ、対峙していられる。

しかし、それも絶対ではない。

永を追う組織の首領が暗殺されることが何度もあった。多くは、同じ目的の組織の潰しあいだが、確実に何件かは永の仕業だった。恐ろしい、と麗春は思う。いつでも誰かに殺されるのではないかと、神経を張り詰めている。

それでも逃げ出すわけには行かない。

魔道師ギルドの通達なのだ。組織に寄って生きるものには、組織の決定に逆らうことなど出来ない。

「なぜ、麗春が久遠を苦しめる？」

麗春は驚愕とともに立ち上がって、声の方へ振り返った。

そこに美しい死神が佇んでいた。

「永！」

「麗春、私達を追いかけのをやめてくれないか？」

麗春は一人でここまで来たことを後悔した。剣は持っている。しかし、永を相手にそれだけでどうなるものではない。永にその気があれば、いまこの瞬間にも首が飛ぶ。

「無理だな……魔道師ギルドはおまえ達を諦めない。そして、おまえが、わたしに手をかけないと知っている。その限りわたしがはずされることはない」

魔道師ギルドは最初から麗春を追手にしていたわけではない。最初はもつと年配で複数の責任者がいたのだが、小競り合いや暗殺に次々と倒れていった。

それで永をよく知る者として、アドバイザー的な存在で麗春がチームに組み込まれた。苦肉の策であったのだ。

そのうち、永が麗春を手につかない。むしろ、何かあれば助けると分かり、魔道師ギルドは麗春を責任者にすえた。

「……誰がその決定をした？」

静かな声に、逆に麗春の血は凍りついた。

「何を……するつもりだ……」

「頭が変われば、考え方もかわる」

つまりは 麗春を責任者に据えた あるいはその案を支持する人間を排除 暗殺するということだ。

「ばかな！ 魔道師ギルドを敵に回すつもりか！」

永は不思議そうに首をかしげた。

「すでに敵だろう？」

麗春は息を飲んだ。

確かにそうだ。ギルドは永を追いかけている。追いかけて、久遠をとりあげようとしている。永にとっては敵でしかない。

そして永は 逆襲するための牙 ? 裁? 仕込みの暗殺術 を持っている。

大人しく狩られるだけの獲物ではない。

麗春は言葉をなくした 返答しだいでは、永は本当にそれをするだろう。

答えを得られなかった永は静かに告げた。

「考えておいてくれ。久遠は最後まで麗春のことを気にかけていた。自分は麗春の足枷になってしまおうと。だから もう自由になって欲しいと言っていた」

それだけ言うと、永は立ち去った。

永の姿が見えなくなると、麗春は膝をついた。全身に汗が噴出した。身体の震えがとまらなかった。わずかな対峙の間に全ての気力を使い尽くしたようだ。

久遠が、自分を永に託した理由は、薄々気がついていて 自分では久遠を護りきれない。久遠に託されていたとしても、いつか、ギルドに久遠を渡していただろう。

永ほど 強くはない。

永は やると言えば本当にやるだろう。元々殺人を禁忌とは教えられずに育った人間だ それだけの腕もある。

魔道師ギルドはその危険性を考えていなかったのだろうか? 現場だけで片付くと?

麗春は戦慄した。

「わたしは……どうすれば……」

永は 途方にくれていた。

「どう しようか？」

応えは無い。

いまだ培養球の久遠は眠ったままだ。

永は自分で目標を決めることが苦手だった。

組織のための道具に、そんなものは、いらなかったからだ。

？裁？にいた頃は、考える必要などなかった。どこへ行き、なにをするかは組織が決めた。自分はどうすれば目的を達成できるか工夫すればいい。命令の理由も動機もなにも考えず、目的を達成することのみが、悦びだった。

今は自分で考えなければならぬ。

最優先は「久遠とともにあること」。そのためになにをすればいいのか？

魔道師ギルドの首脳陣を全て暗殺するのは、困難ではあるが不可能ではない。

しかし、どれだけ殺せばいいのか、見当がつかない。殺しすぎれば恨みを買う。その匙加減が難しい。永がギルドの幹部に手を出さなかったのは、いちおう久遠が所属していた組織であり、多少なりとも縁があったからだ。カトラスの紅蓮を見逃しているのも、直系になにかあればカトラス商會が本気になるからだ。その程度の判断はできる。

だが、麗春が絡んでいるとあれば仕方ない。

とりあえず、麗春を責任者に置いておく考えの幹部から殺せばいいのかも知れないが、麗春は教えてくれなかった。

そこから調べるしかないだろう。どこの誰だか分かれば、暗殺はたやすい。？裁？がでてくれば多少むずかしくなる。

そんなことをつらつら考えていた永は、覚えのある感覚に顔を上げた。

複数の殺気　そこまではいかなくとも悪意　と気配。それは
自分に向けられたものではない。しかし、そちらの方向には
(麗春)

死神は語る（後書き）

自覚が遅い。口下手な永さんでした。

予期せぬ出来事

人の気配に麗春が顔を上げると、いつの間にか囲まれていた。

相手は五人ほど。人相のよくない、卑しそうな男ばかりだ。武器も服装もばらばらだが、全員そろいの長い外套を肩に引っ掛けている。

麗春は立ち上がり身構えた。剣に手をかける。

「あんた、魔道師ギルドのお偉いさんなんだってなあ」

背は低いが横幅がある男が卑しい笑いを浮かべながら言う。

「悪いが、付き合ってもらうぜ」

首領格らしい体格のいい男が言った。

「お断りだな。どこの手の者だ？」

言い返ししながら、麗春冷静に考えていた。オードウグ教関係は真つ先に除外。オードウグ教関係者にしては、品性がなさすぎる。

彼らに共通する敬虔な信者らしき真摯さが無い。ごろつきを雇う組織は、多すぎてどことは言い切れなかった。

「力づくできてもらうぜ」

首領格の男が嬉しそうに言うと同時に、麗春は象徴音を発していた。

魔法を発動させるのには様々な手順があるが、麗春はこれを短縮させるための術を開発していた。剣の刃には呪文の代用となる文様を刻んであり、その柄に触れ、魔法を象徴する音ひとつで魔法を使う。本来の威力よりは劣るが、長い呪文の詠唱を必要としないだけに、使い勝手がいい。

麗春の回りに火の玉がいくつも生まれ、男達に襲いかかった

だがそれは、男達が慌ててかざした外套に触れたとたん、消えうせた。

「抗魔法布か！」

魔法を無効化する呪を織り込んだ布である。高価であり、ごろ

つきぐらいでは手が出ない代物だ。そんなものを支給するといえれば一番可能性があるのがカトラス商会だ。

「あの、狸が！」

麗春の脳裏には、紅蓮の営業用の笑顔が浮かんだ。紅蓮は自分用の手足を持たない。情報を持っているだけだが、これがなかなか性質が悪い。必要に応じて各地の支部の人間をけしかける。

その支部の性格にもよるが、地元の利がある。なによりも、紅蓮自身にはなんのリスクもない。各支部の人間は自分の財力や人材の限りを尽くして永を捕らえようとする。全滅したとしても、それは支部のことになる。紅蓮自身の腹は痛まない。

だが、それはときに紅蓮の思惑を超えた事態を引き起こすこともある。手柄に目の眩んだ支部の人間が交渉をぶち壊してしまうこともあるのだ。

これもそうだろうと麗春は考えた。

麗春は攻撃魔法を盛大にくれてやった。降りそそぐ火の玉を男達が外套で防ぐ。布一枚で防げるとはいえ、火の玉の雨は男達をひるませた。

その隙に、麗春は逃げようとした。魔法を防がれるようでは、勝ち目はない。剣を持っていても、しょせん魔道師である麗春が複数の男達に敵うはずもない。

その背を向けた瞬間、布をかぶせられた。

「ああ！」

抗魔法布をかぶせられては、魔法が発動しない。布の上から飛び掛られ、麗春は転倒した。すぐさま布ごと縛られる。こういうことに慣れているのか、男達の手際はいい。布のわずかなずれから外は見えるが、騒いでも助けは来ないだろう。

「手間、かけさせやがって」

「おつかねえ、女だぜ。抗魔法布の支給がなけりゃ、黒こげだ」

男達が忌々しげに、罵った。首領格の男が刃物を突きつけた。

「大人しくきてもらおうか。その奇麗な顔に傷をつけられたくなけ

ればな」

麗春は唇を噛んだ。

「麗春をどうするつもりだ？」

いつの間にか木立の向こうに永がいた。男達が息を飲む。

「いつの間に」

「やっちまいますか？」

「いや、待て。近づくな！」

首領格の男が手下をとめた。

「長い髪に、女みたいな顔をした優男……おまえ、永だな」

首領格の男は、永から手下の影になるように微妙に立ち位置を変えた。むろん、麗春には刃物を突きつけたままである。

永がさりげなく位置を変えようとした。

「動くな！ 女が傷物になってもいいのか！ 殺せなくとも、目や指の一本なら、なくなってもかまわないよな」

永の動きが止まった。

「あんたがおつかねえ相手だつてのは、聞いてるぜ。ついでに、この女を守ろうとするつてのものな。女を傷物にしたくなけりや、剣を捨てる。できるだけ遠くに投げるんだ」

永は溜息をひとつついて、剣をとり、鞘ごと投げた。永の位置から攻撃しようにも、手下たちが邪魔になる。それを排除する間に男は麗春を傷つけるだろう。いうことを聞いているようにみせた方がいいと判断した。

背の低い男が投げられた剣を取り上げた。

「永つてこいつがですか？ へへへ、おつかねえつて、強そうには見えませんがね」

「命が惜しけりや、近づくなよ。一人で何十人も一度に殺せる凄腕だ」

首領格の男は警戒を解かなかった。

「一緒に来てもらおうか？」

永は頷いた。

手の中にあるもの

「これはこれは、麗春さん、ならびに永さん。このたびは申し訳ございません。手違いでこのようなことになってしまい、わたくしとしても、大変心苦しく思います。わたくしとしては、できうるかぎり友好的にことを進めたかったのですが、なにしろ幾人も考えがありますと、時にこのような行き違いもございます。処遇についてはなるべく早期に改善いたしますので、御不快かと存じますが、今しばらくの御辛抱をお願いします。重ね重ね、申しますが、これはわたくしの本意ではありません」

「しかし、好機を逃す気もない。そういうことだろう」
紅蓮の口上を麗春がさえぎった。

「そのとおりです」
永と麗春は街の外れの屋敷につれてこられた。古い大きな屋敷だが、外から見れば木々が生い茂り薄気味悪いようだが、中は意外と手入れされていた。

おそらくは、公にできない仕事のために使用するための屋敷だろう。

その一室に押し込められたのだが、麗春は椅子に座らされ、複数の刃物を突きつけられていた。永はそこから離れた場所に立たされている。二人の間には常に何人かが壁のように立っている。永がなにかしようとしても、邪魔になるようにとの配置だろう。武器は当然取り上げられている。

「できれば、麗春さんはすぐにでも解放してさしあげたいのですが、それは我々の命に関わります。永さんとの交渉が終わるまで、申しわけございませんが、こちらにいていただきます。さて」

ここで紅蓮は永に向き直った。

「このようなことになって、大変申し訳ございません。しかし、我々の調査によれば、まだモノは魔道師ギルドに渡っていないかったよ

うですね。あなたが所持しておられる。どうでしょう、譲っていただけませんか？ 我々カトラス商会は、その技術に興味があります。その代償として、我々は久遠さんを人間として認めるように働きかけますし、あなたと久遠さんが一緒にいられるようにいたします。もちろん、一生遊んで暮らせるほどの金銭もお渡ししますよ。そうですね、手付けとして　ぐらいでは？」

ここで紅蓮が口にした金額に、麗春と永を除く全員が目を剥いた。あまりにも莫大なものだが、その価値を知る者なら、当然な額と思うだろう。

「魔法生物が孵化　というのも、おかしな表現ですが　した後、それが紛れもなく久遠さんであり、その技術を我々が獲得した後で、またそれに見合った金額をお支払いいたします。あなたの望みは、久遠さんと共にあることです。それがカトラス商会の保護下に入るというだけではありませんか。悪くない話だと思いますが、いかがでしょう」

「ことわる」

即決で永が断った。

「多少でも考慮の余地はないのでしょうか？　この先、なんらかの援助はどうしても必要ではないかと、思うのですか？」

「久遠の意思だ」

永の応えは迷いがなかった。

久遠は自由になりたいと言っていたのだ。保護といえば聞こえはいいが、閉じ込めて監視するということだ。それは久遠の意思に反する。最初から考慮するに値しない。

「では、仕方ありませんね。しばらく、この屋敷にとどまっていたくださましよう。服を脱いでいただけますか？」

突然の申し出に、むしろ屋敷の男達の方が驚いた。

永は素直に上着を脱いだ。抵抗しても意味がない。

「服を手の届かないところにゆっくりと投げてください。そのあなた、持ってきてください」

永は軽く手の届かないところに服を投げた。服はいやに重い音を立てた。紅蓮に言われた男が拾って届けたが、紅蓮はあくまでも永に近づこうとしなかった。

紅蓮が服のあちこちを探ると、小さな刃物や暗器、なにに使うか分からない小さな道具が出てきた。

永を囲んでいた男達に動揺が走った。丸腰だと思い込んでいた男は、実は武器を大量に隠し持っていたのだ。それを知らず、気安くそばにいた。実はいつ喉をかき切られても不思議ではなかったと知り、男達は思わず身を引いた。

「下もお願ひします」

ズボンも脱いで同じように放る。

紅蓮が探るとやはり布の折り返しや、あちこちから色々出てきた。「それもです」

下着一枚になった永に、さらに脱ぐように命じる。

永が一瞬、麗春の方に視線を走らせる。もちろん、紅蓮はそれに気がついた。

「ああ、これは配慮が足りませんでしたね。誰か、麗春さんを別室に。鄭重にあつかってくださいよ」

麗春についていた男が麗春を立たせた。

麗春は顔を上げ、絶対零度の一瞥と言葉を紅蓮に浴びせかけた。

「おまえが、そういう趣味とは知らなかったな」

氷より冷たい麗春の一言に、紅蓮の笑顔が凍りついた。

「とんでもない！ わたくしには、そちらの方の趣味はありません。わたくしは妙齡の女性の方が好みます。あ、いえ女性にこのような真似はいたしません。わたくしは紳士ですから。これは、あくまで保険です」

「どうだか」

必死に弁解する紅蓮に麗春は冷たく言い捨てた。

「れ……れい……しゅん……さん」

紅蓮がよろけた。その顔は直視するのが憚られるほど強張っている

た。

打ちのめされた紅蓮を尻目に、麗春は先導するはずの男に先んじて部屋を出た。その一瞬に微かに笑みを浮かべたことに気づいた者は、ほとんどいなかった。

無言で一部始終を見ていた永は知っていた。麗春がそのような誤解をするような知性の持ち主ではないことを。分かっていたやっただ意趣返しだろうが、それをわざわざ教える必要を感じなかった。

冷たい言葉に打ちのめされた紅蓮は、それでも当初の目的を忘れなかった。

「服を脱いでください……女性は別室に行きましたので。ですが、異変があればどうなるか、分かりますよね」

永は従ったが、さすがにそれからはなにも出てこなかった。

「髪もほどこください」

「……本当にそういう趣味ではないだろうな？」

「違います！ わたくしは異性愛者です。ええ、どんな神にも誓えるほど、まっとうな異性愛者ですとも！」

声は半分泣いていた。しかし、前言を撤回する気はなさそうだった。

永はあきらめて髪をほどこいた。髪から小さな金属片が転がり落ちた。

紅蓮が探ると、髪紐から細い金属の糸が出てきた。小さな山を作る隠し武器に、紅蓮が溜息をついた。

「ここまでしないと、武装解除もできないのですか？」

「不足だな。四肢を切り落とし、首を刎ねるがいい」

そこまですなければ無力化したことにはならないと本人が言う。事実、麗春がしたのがそれに近い。？裁？の暗殺者が無害になるのは死体になったときだけだ。

紅蓮が苦笑いを浮かべた。

「分かっていますよ。その四肢 魔法義肢は武器になりますし、あなたは素手でも人が殺せる。無力化するには殺すしかない。生き

た兵器。そういうものです」

永の身体の大半は、負傷により魔法義肢と交換されているはずだが、不自然なところは何もなかった。引き締まった長身はしなやかで、均整が取れている。それが久遠の作品というのなら、久遠の美意識は確かだ。彫像のように形よく、作り物であるはずの義肢にさえ血が通っているような色合いを見せる。本来の肉体と、義肢であるはずの部分の区別がつかない。

何も知らなければ、ただ美しいだけの肉体にしか見えない。

「あなたに手を出させない唯一の方法は、その気にさせないことです。いくら技術を持っていても、それを使う気にならなければいい。我々が今生きていられるのは、麗春さんがいるからです。あなた一人なら、なんとでも切り抜けられる。しかし、これだけの人数では、麗春さんに不慮の事故が起きるかもしれない。あなたは麗春さんに危害が及ぶことを恐れている。それだけが、あなたを縛り、我々を永らえさせています。ですから、麗春さんを今お返しすることはできません」

紅蓮が大きく息をついた。

「正直、不本意なのですよ。我々として魔道師ギルドと事をかまえる気はありません。しかしあなたが手中にいる限り開放できない。手詰まりもいとこです。こんな綱渡りの状態は。どうかたをつけたらよいものか……気は変わりませんか？」

永は返事をしなかった。それは言葉にするまでもないことだからだ。

しばらく返事を待っていた紅蓮は、軽く肩をすくめた。

「では仕方ありませんね。新しい衣服を持ってこさせますので、着替えていただきます。その後、お部屋の方へ案内させますので、大人しくしていただきます」

永を監禁場所へ連れて行かせたあと、部屋を出た紅蓮は大きく息をはき、壁にもたれかかった。

紅蓮にとつても元？裁？の一人となんの障害もなく顔をあわせることは、肉を食う猛獣と同じ部屋にいたのに等しい。交渉相手に最初から脅えているところを見せるのは、商人として失格である。平気なふりをしていたが、やはり疲れきってしまった。

そんな紅蓮の様子にも気づかず、香昌が話しかけた。

「なぜ、品物を奪わなかったのですか？ 手の内に困い込んでしまえば、どうにでもできるでしょう？」

「永さんは品物を所持していませんでしたよ。それよりも香昌さん、麗春さんをさらうとは、どういうおつもりですか？」

紅蓮にしては珍しく苛立ちがこもっている。しかし、付き合いのない香昌にはそれが分からなかった。

「あの時点では、魔道師ギルドに品物が渡ったと思われていましたからな。責任者を捕らえれば」

「魔道師ギルドが麗春さんと引き換えに品物を渡すとても？」

紅蓮がはつきりとした嘲笑を浮かべた。

「断言しますが、それはありえませんが。確かに麗春さんも重要な人物でしょうが、格が違いますね。『久遠』と麗春さんならば、魔道師ギルドは一瞬の躊躇もなく『久遠』をとるでしょう。あなたのしたことは、ただ魔道師ギルドに喧嘩を売っただけです。構成員それも幹部クラスの人間に手を出しておいて、魔道師ギルドが放っておくと思いますか？ 我々が築いてきた関係をぶち壊すおつもりですか？ 麗春さんだけならば、お詫びの品とともにすぐにでも魔道師ギルドにお返ししたいところですよ」

自分のやり方を非難された香昌が不機嫌そうに顔をゆがめた。

「そう思われるならば、そうしたらいかげすかな？」

「死にたいのですか？ あなた」

嘲笑と怒気をブレンドした笑みを張り付かせた紅蓮は憤りの元をぶちまけた。

「永を手元に置くことが、どれだけ危険かわからないのですか？」

永が大人しくしているのは、麗春さんの存在が彼を縛っているから

です。それがなくなれば、彼は我々を殲滅し、悠々と無人の屋敷から出て行くでしょう。返したくとも、返せない！ 我々の命をつないでいるのが麗春さんだけです。しかし、このままでは魔道師ギルドとの関係悪化は免れません。この始末をどうつけるおつもりですか？」

「過大評価しているのではありませんか？ 見たところ、ただの優男にしか見えませんが。わたくしならば、品物をさっさと奪い、麗春とかいう小娘をギルドに送り返しますがね」

「あなたは御存じない。あの男がどれだけ危険か！ その優男が、魔道師ギルドやオードウグ教、我々カトラス商会の追っ手を振り切りあまたの組織を殲滅してきたのですよ」

非難しながらも、紅蓮は心理的に香昌を見捨てた。どれだけ言葉をつくそうと、この男が永の真価に気づくことはないだろう。美女もかくやという美貌に目を曇らせ、侮っている。この男が永の実力を目にするときは、死ぬときだろう。

「考えすぎだと思いますがね。組織が潰されたり手を出し辛かったのは、互いに牽制しあっていたためでしょう。魔道師ギルドへはかっこうの押さえができましたし、オードウグへの押さえも手に入れました。後はあの男を締め上げてさっさと品物を」

「今なんとおっしゃいました？」

全ての表情が紅蓮の顔から消えていた。

「ですから、永を締め上げて」

「そこではありません。オードウグへの押さえとおっしゃいましたよね？ まさか、麗春さんにしたように、オードウグ教の信者を、拉致監禁したというのではないでしょうね？」

「そのとおりですが、それがなにか？」

香昌が当たり前のように口にした言葉に、紅蓮は打ちのめされた。その場に膝をつき、両手について身体を支える。

「ああ、あなたはなんと！ ここにランバトルさんが来ているというのに！」

紅蓮の脳裏に、この二年のあいだに不本意ながら巻き込まれかけたり、その目で見てしまった永とランバトルの戦いと、その被害をこうむり破壊されつくした、あんなものや、こんなものが浮かんで消えた。真つ青になり、最善の策を考えた。

（来る……あの男が来る……最悪の選択だ。もうこの支部はおしまいだ。しかし、他に飛び火するのは抑えなければ。ダメージを最小にするには……）

紅蓮が答えをはじめ出すのにかかった時間はわずかだった。弾かれたように立ち上がり、香昌に向き直った。

「わたくしは、魔道師ギルドとオードウグ教への根回しをしなければなりません。すぐに采賀へ向かいます。後のことは香昌さんにお任せしますが、くれぐれも麗春さんとその信者の方を傷つけるような真似はしないでください」

「そうですね、それは残念です。品物は必ずや手に入れてみせましょう」

香昌は、表面上は残念そうに言ったが、内心では快哉を叫んでいた。これで手柄は独り占めだ。

「では、これで失礼いたします」

紅蓮には香昌の思惑など手に取るように分かったが、むしろ心の中で香昌を哀れんだ。それはあり得ない。紅蓮の中ではすでにこの支部はなくなっても同然だった。

紅蓮は加羅伊の支部がなくなつたあとの対処をするために、一番近くの支部行くのである。

今はなにより、ここを放れるのが先決だった。沈む船に残る鼠はいないのである。

だが、その紅蓮にしろ、舞台裏で動き回るもう一人の登場人物には気づかなかつた。新たに舞台上が上がってきた人物を知るのももう少し後のことである。

その人物によりカタルシスは早まり、結局のところ紅蓮はわずかな時間の差で死神の手を逃れたのである。

手の中にあるもの（後書き）

紅蓮、手に負えないものを抱え込みました。痛恨事。

歩く災厄

「なに？ 教女アンジェラが戻らぬと？」

ランバトルは手を止めた。手練の技で磨き上げた教会はすでに塵ひとつ落ちていない。古さは隠しようもないものの、丁寧に清められた床も壁も、見間違えんばかりである。ステンドグラスもいちだんと磨き上げられ、家具も手入れされている。どこもかしこも美々しい。

この男が通ったあとは、オードウグ教の敵は殲滅され、教会には塵ひとつない。

ランバトルは重々しく告げた。

「あいわかった。乾拭きと後片付けも某がしよう」

「そういう問題ではございません」

年配の支部を任されている教団員は少しばかり困った顔をした。

「朝から街の復興のお手伝いをしておりましたが、食事を配ったあと、あの子の姿が見えません。こちらにお邪魔していないかと思いまして」

「む？ 某は朝から掃除をしておるが、今日は見ておらぬぞ。なるほど、教団員の姿を見ないと思っておつたら、復興の手伝いをしておつたのだな。救いを求める者に手を差し伸べるのも、神に仕えるものの役目であるな」

感心感心と頷くランバトルの頭の中には、その被害を与えた張本人であるという自覚は欠片ほどもない。きれいさっぱり忘れ去られている。三歩行けば忘れることがたくさんあるのだろう。

目的のための被害は最初から眼中にない。

「聞けば町中の被害は酷いものだそうではないか。顔見知りもいるのであろう。なにかの手伝いをしているのではないか？ 少々時間に遅れたからといって、叱咤するではないぞ。未熟なときは色々迷いも多かるう。時には許すことも大事であるぞ」

「はい。もちろんでございます。こちらに顔を出しましたら、すぐに帰ってくるように伝えてくださいませ」

「うむ」

教団員は礼をのべて帰っていった。

ランバトルは言葉どおり乾拭きした。もはや顔が映りこむぐらいに磨き上げられている。部下はいつもながらの手練の技に感心した。「うわぁ、本っ当に掃除してるよ、このおっさん」

いるはずのない第三者の声を聞き、それまで気配すら感じ取れなかったランバトルは驚愕して振り返った。

そこに、ふわふわの金色の髪をした小柄な男がいた。愛くるしい童顔だが、そのアンバーの瞳の中に油断ならぬ光を発見し、ランバトルは身構えた。

その顔に見覚えがあった。昨日永を追いかけていた男だ。なによりも、男は空中に浮いているのだ。遙か高みからランバトル達を見下ろしている。

怪しい。あまりにも怪しすぎる。

「おのれ、妖術か！」

「違う、違う。手妻みたいなもんさ。仕掛けもタネもあるよ？」

蹄はにっこり笑って答えた。

「む、手妻か？なるほど」

ランバトルは仕掛けがあると聞き、納得した。

しかしそれが、張り巡らされた眼に見えぬほど細い鋼糸を足場に行方知れずということを知ったら、警戒を解かなかつただろう。

「して、なにようだ？この前の続きをしたいというのなら」

「とあんでもない。そこまで命知らずじゃないさ。教団あんたらの中で、行方知れずになってる子がいるだろ？」

「なに！」

ランバトルは今聞いたばかりの事を思い出した。

「赤毛をおさげにした、女の子だよ。教女アンジェラちゃんだった？若いよね。まだ見習いかな？」

「貴様の仕業か！」

ランバトルは激昂したが、武器が届く高さではない。聖衣を着ているならともかく、生身では飛ぶこともできない。

蹄が手をふって否定した。

「ちがーう、こつちも一人、さらわれてんの。休んでたら、帰ってこないって言うんでさ、探してみたら、ややこしいところに捕まっていた。そこに一緒に閉じ込められてる女の子がいて、オードウグの教団服きてたから、知らせにきてあげたわけ。親切でしょ？」

「……何を企んでおる？」

「共闘できねえ？ こつちは人質を全員無傷で助けてみせるぜ。そのかわり、そつちは表で騒ぎを起こして注意を引いて欲しいんだけど」

蹄は涼しい顔で提案した。つい先日、執行員を十一人も殺したくせに、その力を借りようというのだ。厚顔もここに極まる。

「こつちの人質一人なら、いくらでも連れて逃げられるんだけど、二人となると手間なんだよね。手伝ってくんない？」

「我が教団の敵とあらば容赦はせん。我々が殲滅する。場所だけ教えるがいい」

横柄に命じるランバトルに、多少なりとも神威代理執行局のやり方を知っている蹄は肩をすくめた。

「ジョーダン。力任せに騒ぎおこしたら、人質の命が危ないんだよ？ そつちは尊い犠牲ですますかも知れないけど、こつちが困るわけ。そつちが態度じゃ、教えらんないな」

神の威光を重要視する神威代理執行局は、時として回りの被害をまったく無視する傾向がある。人質ごとの犯人殲滅も珍しくはないのだ。彼らにとっては、あらゆる被害は神の威光を示すための尊い犠牲にすぎない。被害を避けようとする気もなければ、悔いることもない。

それ故に外部からは狂信者の集団とみなされている。

「むづ……」

「突っ込むなら、それでいいさ。ただし、ある時間まで待つて欲しい。それまでに人質は救出する。条件はそれだけ。ノルかい？」

「よかるう。時間と場所を言うがいい」

「場所は町外れの、リシン地区の一番でかい敷地の屋敷。カトラス商会がヤバいことに主に使うところだ。たぶん、ここの人間に聞けばわかるぜ。夕方の鐘がなる時間に頼むぜ」

「黒幕はカトラス商会か！」

「おっと、時間まで手出し無用だぜ。人質救出した後なら、いくらでも暴れてもいーけど、気づかれたら手が出しにくくなる」

蹄は釘を刺しておいた。

蹄もできれば神威代理執行局の力を借りるなどというリスクを犯したくなかったが、この街の動かせる人員が底をついていたのである。敵の敵は味方というわけではないが、使えそうなものは使えない。

なるべくリスクは減らしたい。こちら側の人質の名を伏せておいたのも、無用な危険を避けるため。まして　そこに永までもが囚われていることを知ったらどうなるか　考えると恐いことになりそうなので、黙っていた。

「くれぐれも、時間は守ってくれよ。万が一のときは、こつちの人員の救出を優先させるからね」

言うだけ言うと、蹄は逃走した。足場にした鋼系の端を斬り、鋼糸を使って空中を滑降する。外に飛び出すと、室内の残りの系の端を斬り回収　手妻のタネはまだ明かさない。

「追いますか？　ランバトル様」

「やめておけ。その方になう相手ではない」

つい昨日、聖衣を壊されたことをランバトルは忘れていなかった。その前、少々手合わせしたこと、永がてこずっていたことを考え合わせれば、見かけによらず男が手練であることはわかる。

「聖衣の用意をせい！　教団の敵を叩くぞ」

歩く災厄（後書き）

まさに生きた災害。 恐い恐い。

道化の操り糸

かすかな予兆を永の感覚は逃さなかった。一室に押し込められ、外には見張りもいるだろうが、そんなものをものともしない者がこの世にいることを、永は知っている。

永は天井の一角を見上げた。

「遅かったな」

「ありや、わかっちゃった？ 音は立ててないはずなんだけどな」

天井の一角がはずれ、ふわふわの金髪がひよっこりのぞいた。蹄がさかさまに顔を出した。

麗春は魔道師ギルドの一員だ。姿が消えれば組織内で探す。あるいは、商会の方から何らかの要求があったのかもしれない。

ならば、必ず奪回のために人を動かすだろう。永はそう思っていたので驚きもしない。

「麗春をつれて逃げる」

「そりや当然やりますよ、旦那。お仕事だからね？ 旦那も確保したいところだけど、さすがにそこまで欲張れないから、自力で逃げてくれない？ ギルドとしては、アレがよそに渡るのはさけないんだってさ」

「言われるまでもない」

人質がいなければとくに逃げている。

「じゃあ、一時休戦ってことで。あいつら、調子んのもって、教団の一人、まあ見習いの女の子らしいけど、監禁してんの。オードウグ教にそんな脅しが効くと思ってるのかね？ チクツて協力仰いだから、あのおっさんが来るぜ。その騒ぎにまぎれて上手に逃げてちょうだいね」

「……おっさん？」

「爆裂宣教師つての、あのとんでもねえおっさん」

「……あいつは二十八だ」

「げっ、俺と二つしか違わねーの？」

蹄が顔を引きつらせた。二つということは、蹄は二十六ということになる。随分と若くみえる。永は心の中で呟いた。

(年上だったのか……)

「奴が来るのなら、できる限りここから放れる」

「あれま、一戦交えるつもり？」

「……そういうこともある」

顔をあわせれば、他の任務は放棄しても向かってくるだろう。迎え撃つしか道はない。隙を見て逃げ出すが、それまでどれだけの被害がでるか、永にも予測できない。

「得物はいるかい？ なんならそこら辺からぱくってきてやるけど」
新しい衣服は与えられていたが、武器の類は全て取り上げられている。
「無用」

永の両手 あるいは衣服に隠れた肌も が黒く染まった。それは首の下の方から白い肌を侵略し染めてゆく。それは黒い 細かな鱗の連なり。

防具はその面積が広くなれば重くなり動きを阻害する。稼動部分を作ればそこが薄くなる。天才久遠はその解決策として自然界にある鱗を選択した。

袖を切り裂いて、腕の一部から刃が飛び出した。背中 of 布地も破れ、蝙蝠のような皮膜の羽が生えた。

全てが闇を切り取ったような漆黒。

「……それが旦那の奥の手かい？」

もう一度永は警告した。

「逃げる、災厄が来る前に」

その左の目は赤く染まっていた。

少女が泣いていた。

それは赤い髪で、失われた少女の灰色の髪とは違う。それでも

脅えて泣く少女に、麗春は記憶の中の最愛の妹を重ねてしまった。
「神様、教司さま、どうかお救いください」

オードウグ教でもまだ下っ端なのだろう。祈れば救いがあると思っ
っているらしい。

「大丈夫。すぐに助けが来るから」

名も知らぬ少女が泣き濡れた顔を上げた。特別美しいというわけ
ではないが、歳相応な可愛らしい少女である。

「お姉さまも、浚われたのですか？」

「ええ、そうよ」

「ああ、こんな無法なまねがこの街でおきるなんて……わたしたち
売られてしまうのでしょうか？　そして酷いめに……」

しくしくと泣く少女を麗春は元気付けた。

「大丈夫。この街に神威代理執行局の人がきているでしょう？」

「はい……ランバトル様という、とてもお偉い人がきていますわ」

「わたしはその人のことを知っているけど、こんなまねを許す人じ
やないわ」

一瞬少女の顔が輝いたが、すぐにまた心配そうな顔をする。

「でも、こんなにくさんの悪人では……ランバトル様でも」

少女は本気でランバトルの身を案じているようだった。

麗春は一瞬笑いの衝動にかられたが、それを押さえ込んだ。オー
ドウグ教、最強にして最狂の人間兵器ランバトル。その身を心配す
ることほど無駄なことはない。

たとえ一人で軍隊を相手にしても無傷であろう。それからみれば、
たかがカトラス商会の支部のひとつ、相手が不足だ。

「あら、知らないの？　あの人はとても強いだよ」

「そう……ですよね。きつとランバトル様がお救いくださりますわ
麗春の力強い言葉に少女は安心し、神への祈りを捧げ始めた。

確かにオードウグ教の敵は殲滅されるだろう。しかし、時として
味方ごとの殲滅や、人質の安否は無視するという事実を麗春は黙っ
ていた。

少女の夢を打ち砕くのは哀れだったからだ。

扉がひかえめに叩かれた。

少女は脅えて麗春にしがみついた。

「お嬢さん、あけていいかい？」

「蹄か？」

キンというかすかな音が響き、扉が少しだけあいた。そこからのぞくのは蹄の金色の頭だった。

「助けに来ましたよ」

開けた扉からするりと蹄が中に入り、扉を閉めた。

「早かったな。夜を待つのかと思ったぞ」

「いやあ、そーしてもよかったですけどねえ、怖いのがきそうだったんで、早めました。お嬢さん一人ならともかく、そっちの子がいたんじゃないかねえ」

蹄の言わんとすることは麗春にもわかった。

「お知り合いですの？」

事態を飲み込んでいない少女が麗春に尋ねた。

「蹄、こっちの子は」

「教女見習いのアンジェラちゃんだね？　一緒に逃げてもらっつよ。

大丈夫、ちゃあんと教会まで届けてあげるからね？」

蹄はそういうと、アンジェラの頭から布をかぶせてしまった。

「な、なんですの！」

「ちよつと、怖いからこれ被っててね。足元悪いから、おにーさんが運んであげるから」

アンジェラを荷物のように担ぎ、蹄は扉に手をかけた。

「いきますよ」

「大丈夫か？　そんなに堂々と」

「このあたりは無人ですよ。それに、すぐそれどころじゃなくなりますが、まずから」

蹄が無遠慮に部屋の外にでた。

麗春も廊下に出て　なぜアンジェラを布で覆ってしまったのか、

足場が悪いのか、理解した。

部屋の外は生きている人間はいなかった。ただ、生々しいかつて人間であったものの断片、輪切りになった死体がごろごろ転がっているだけである。確かに無人だ。

あたりには濃い血臭がただよい、嘔吐を促す。こんな光景をアンジェラが見れば卒倒するだろう。

糸使い　見落としそうなほど細い鋼糸を使う暗殺者。その最大の利点は隠密性に優れたことである。特に優れた者は姿も見せず、犠牲者の気がつく前に殺している。

おそらくは、蹄がその気になれば屋敷の人間全てを殺しつくすことも可能だろう。

「足元悪いんで、気をつけてくださいね？」

「……分かった」

これだけの虐殺をしておいて、屈託なく笑える蹄を、麗春は怖いと思った。

道化が人血で書いたシナリオに、あるものは知らずに、あるものはそうと知っていて踊る。

目に見えぬ操り糸の導くままに。

道化の操り糸（後書き）

黒い。黒いです。蹄暗躍

賽は投げられた

盛大な後光のような魔法光と稼動音、巨大な白い甲冑。その姿が視界に入ったとき、見張りは我が目を疑った。

あまりにも現実離れした光景だった。

見張りがあまりのことに呆然としてしていると、その稼動音に負けないうぐらいの音が響いた。

「某は神威代理執行局に所属するランバトルと申す。この屋敷に我がオードウグ教の者が囚われていると聞いた。つまりは汝らはオードウグ教に仇なすもの！ 我らが使命はオードウグ教の敵を滅ぼすことなり！ 観念いたせ！」

それは吼えると、手に持った巨大な矛を振り上げた。矛の先が回転し、唸りを上げる。

我に返った見張りが飛びはなれたとたん、巨大な矛は丈夫に作られた門扉を粉碎した。

「なんだ！」

「何事だ！」

轟音につられて屋敷のあちらこちらからごろつきどもが集まってきた。そして彼らはそれを目にし、一瞬呆然とする。

「うわーはははは！ 集まってきたようだの、神敵どもが！ このランバトルが一人残らず討ち取ってくれようぞ！」

爆裂宣教師は粉碎した門の残骸を踏み越えた。巨大な矛を振り上げ、けたたましい轟音とともに男達に躍りかかる。

その轟音は屋敷から少し離れたところからも聞こえた。

「奴がきたな……」

蹄が作った血路を辿り屋敷を抜け出した麗春は、心の中で屋敷の人間の冥福を祈った。

「なんですの、すごい音が

」

必死に布をずらそうとするアンジェラだったが、蹄がすかさず布のずれを直す。

「見えませんわ。この布をどけてください」

「気にしない、気にしない。あつちで気を引いていてくれるから、こつちは大丈夫。ひたすら逃げますよ」

軽い調子で言う蹄も心なしか足を速めているようだった。

轟音に壁が震えた。

屋敷の奥に囚われていた永にもそれがわかった。

(来たか)

部屋の中にあわただしい足音が聞こえる。永は扉を一瞬で細かく両断した。扉の残骸が崩れ落ちる前に永は飛び出し、部屋の前を通りかかった相手の首を刎ねた。

その気になれば部屋の外にいた人間を、声を立てるまもなく皆殺しにすることも可能だったが、あえてそうはせず駆け出した。

「ば、化け物だ！ 誰か！」

後の方で人呼び集める声が響いた。

ただ逃げ出すだけならそんなことをする必要はない。屋根裏、床下、目立たない逃げ道はいくらでもある。ひっそりと誰にも知られぬように逃げ出すのも可能だが、永の役目は麗春が抜け出すまでの囮もかねている。

糸使い一人ならこの屋敷でいどなら無人の野に行くごとく好き勝手できるだろう。

しかし麗春ともう一人 二人の素人を抱えていては、逃走路はひどく限られる。なにか思い切った手を打つしかない。そういうものは人目につくものだ。下手をすれば追っ手がかかる。安全に麗春を逃がすには、それどころではない事態を引き起こしたほうがいい。助けを求める声に応えて集まってきた用心棒を一人選んで袈裟懸けに切り倒し、さらに騒ぎを大きくさせた。

音もなく人知れず事をなす暗殺者としては不本意極まりないが、

せいぜい派手に暴れて人目をひきつけなければならぬ。

なるべく姿をみせつけ、間違っても糸使いが選ばない場所に人を集める。

不本意だが、絶対選ばない場所に心当たりはある 正面玄関だ。

魔法義肢の暗殺者は轟音の元へ向かった。

戦う理由

「ぬおおおおお！」

ランバトルの振り回す矛が建物の一部を粉碎した。音をたてて崩れ落ちる壁。その向こうに思いがけぬ人物を見出し、ランバトルは狂喜した。

「うわーはは！ そこにいたか永！ これぞ神のお導き！ いざ、尋常に勝負いたせ！」

もし永の顔が黒い鱗で覆われていなければかすかに顔をしかめたことが分かっただろう。尋常な勝負。暗殺を生業としていたものにとつては冗談以外のなにものでもない。不意打ち騙まし討ち毒殺それらが信条だ。姿を晒しての一对一の勝負など不本意だ。

「魔道師ギルドの人質が誰かは聞いておらんのだが、汝が出てきたということは麗春でも囚われておったか？ それを助けにでもきたか？ 婦女子をかばうは見上げた心がけよの。なんにせよ、某と顔をあわせてただですむとは思っておるまい」

ランバトルの聖衣に付属している魔法動力発生器がけたたましい音をたてた。それに比例して発光が強くなる。魔法光でなければ目を覆わなければならぬだろう。それに呼応し、永も魔法義肢の出力を上げた。魔法義肢に内蔵されている久遠の創った魔法動力発生器は無音、もしくは自然の臓器と同じでいどの音しか立てない。また目立つ魔法光も永の仕事を考慮し、極力減らして着色し、目立たないようにしてある。

それは対極に位置するものであった。白く輝く甲冑をまとう神に仕える戦士と、闇をまとう黒い鱗につつまれた暗殺者。

まるで後光を背負ったような爆裂宣教師の体が宙に浮き上がり

「いざ、しよー」

魔法義肢の暗殺者の姿がかききえた。ランバトルの面前に漆黒の羽を伸ばした永が現れる。

「おおおおお！」

雄叫びを上げた永がランバトルの懐に飛び込み蹴り飛ばした弾き飛ばされたランバトルの巨体が破壊された門扉に突っ込み瓦礫をさらに細かくし埋まる。聖衣が能力を発揮する前に先制攻撃を食らわせたのだ。

「おのれ！ 不意打ちとは卑怯なり！」

すぐさま瓦礫を跳ね除けて白い甲冑が立ち上がる。すかさず追い討ちをかけるべく永が急降下をかける。これはランバトルが急上昇してさせた。永が飛べるのは翼自体ではなく、そこに付与された飛翔魔法のおかげだ。ランバトルのそれも聖衣に付加された魔法なので本来なら不可能な動きも可能なのだ。永の拳が瓦礫を砕いた。

「ぬおおお！」

爆裂宣教師の矛が唸りをあげる。後ろ向きのまま永の肉体がランバトルめがけて飛んだ。振り下ろされる矛を身をひねってかわし、回し蹴りを叩き込む。

「ぬああああ！」

巨体が前庭を突っ切って屋敷の玄関に激突した。轟音を立てて玄関が砕け散る。

耳に痛いまでの轟音は暗殺者たる矜持を著しく傷つけた。永がランバトルとの戦いを嫌う原因でもある。

ランバトルの聖衣には刃物がとおりづらい。永の技量、久遠が作り上げた戦闘用魔法義肢の仕込み刃をもってしても生身にまで届くかどうか。ならば衝撃を与えて中身にダメージを与える。通常ならそれは正しい。だが。ランバトルという男は異常だった。

「ぬうおりゃああああ！」

瓦礫を弾き飛ばして飛び起きる。

「ふははは、この程度で某をどうにかできると思っておるのか！ 某には神の御加護があるのだ！」

死んどけよ。というか、普通なら死んで当然の衝撃を与えてもまったく毛ほども感じていない。魔法薬で強化しているにしても、

とんでもなく頑強だった。脳みそまで筋肉でできているのだろうか？
「永よ、某を相手にここまで戦い続けるとは、たいしたものよ。それは誉めてやろう。しかし、あの魔女のしたことは許されぬ。神の愛子たる人間を、神の御心にそわぬ魔法生物に変える術などこの世にあつてはならぬのだ！ 差し出すがいい、さすれば汝は見逃そう」
「……………だまれ」

異常なまでに強靱な体。そこまできかなくても人並みの肉体さえあれば、わざわざ人体改造しなくとも久遠は生きられた。そうしなければ生きられなかったものの思いを、この爆裂宣教師が理解することは永遠にないだろう。

「あの魔女の天命はつきておるのだ！ 浅ましいものよの、人間以外のものになつてまで生き永らえようとは！ そのようなものは許さぬ！」

「黙れ！ きさまになにがわかる！」

そうまでして生きたいか、と久遠に尋ねれば、久遠は胸を張って「生きたい」というだろう。運命というなにかの決めたものに、久遠はもてるすべてで抗った。それがたまたま魔法生物という形になっただけのこと。

なんとという強さか。

永は抗わなかった。？裁？の手駒として生まれ育ち、？裁？のために働くことに疑問すら抱かず運命のままに生きてきた。

だから、もう一度久遠に会いたいと思った。もう一度久遠に会い言葉を交わす。そのためなら何でもしよう。

それが本物の愛かどうかなど問題ではない。

自分で決めたのだ。

自由になるものなど、何もなかった。それに疑問も何も持たずただ従うだけの自分は木偶と同じものだった。それでも望んだのはたった一つ　ともに在ること　それさえも許されぬとあれば

「神が久遠の存在を許さぬというのなら、私は神とも戦う」

「この、罰当たりがあああ！」

爆裂宣教師が叫び、矛で撃ちかかった。無音の暗殺者はその懐に飛び込み、弾き飛ばす。

永が追撃をかける。特製魔法義肢は生身の部分に作用し一時的に運動能力、筋力を跳ね上げている。無数の拳がふりそそぎ 常人なら一撃で体を貫かれかねない打撃をもつても 爆裂宣教師はひかない。

ランバトルの聖衣は防御力を強化している。そして薬物により強化された肉体は頑丈、かつ強力だった。外側が防御力を、中身が攻撃力を受け持つ。

「ぬぐわあああ！」

跳ね起きて反撃さえ試みるが、大振りの矛など 普通ならまずかわせない速さだとしても いまの永にはあたらぬ。周りのものを粉碎するだけだ。

聖衣に組み込まれた飛翔呪文と、背の魔法生体の羽に組み込まれた飛翔呪文を駆使して二人の戦いは空中にまでおよんだ。

「ばかな……そんな……ばかな……あれはなんだ……あれは……」

香昌がよるめきながら上空の戦いを見上げた。白く輝く鎧と漆黒の陰。誰がそれを人と思うだろう。人知を超えたなにか としか思えない。

「香昌様、お下がりにください！ ここは危険です！」

天井が不気味な音をたてた。支えるべき柱や壁を打ち壊され自重を支えきれなくなったのだ。建物の一部が崩落する。

「うわああああ」

「ばかな……こんなところで……こんなところで……わしは中央に……こんなばかなああああ！」

二人の戦いに巻き込まれた屋敷は削り取られるように壊れていく。人さえも逃げ切れずに飛んでくるランバトルの巨体や崩れる建物に潰される。

速度を乗せた永の蹴りをくらい屋根を突き破ったランバトルの巨体は壁にめり込んだ。その拍子に天井が崩れ、瓦礫に埋もれた。

「なんの！」

例によって跳ね起きようとした爆裂宣教師は後から引つ張られるような衝撃を受けた。みれば聖衣の一部が瓦礫に引つかかっていた。「ぬぐぐぐ！　こんなときに」

最近では一目散に逃げる永がめずらしくも完全武装し戦う気になっっている。こんな好機は逃せない。引き抜こうと悪戦苦闘するが、複雑な構造を持つ聖衣の中に食い込んでしまったらしく外れない。

このままでは一方的な攻撃を喰らう。

焦って上空を見上げた爆裂宣教師の目に、空中に浮かぶ魔法義肢の暗殺者の姿がうつった。

「私は必ずもう一度久遠と会う。数多の屍を踏み越えようと、どれだけのときが流れようとも」

永はそれだけ言う就上昇した。距離をとって勢いをつけるつもりかとランバトルは思ったが、その姿が遠くなる。

「なに……逃げた……のか？」

呆然とランバトルは呟いた。次の瞬間激昂した。

「ばかな！　ここまできて、なぜ逃げる！　戻って来い！　某と勝負いたせええええ！　永いいいいい！」

喚く爆裂宣教師に目もくれず魔法義肢の暗殺者はその場を離れた。ランバトルを倒す必要は無い。息の根をとめようと思ったら、とんでもなく手間がかかる。麗春を逃がすための時間が稼げれば充分だ。これだけの時間があれば糸使いが余裕を持って逃がしただろう。偶然だがランバトルの動きが止まったのは好機だった。さっさと逃げるに限る。なによりも、そろそろ限界だった。

永は人気の無い場所に向かって飛んだ。

戦う理由(後書き)

愛ゆえです。

ささやかな約束

「あなたとわたしの名前は同じね」

久遠はそう言って笑った。

「『永』は長いとき、限らない時を意味しているわ。『久遠』は無窮の時　同じ意味だわ」

久遠が生まれたとき、すぐに両親は医者から長くない命だと言われたそうだ。一日でも長く生きて欲しい。その願いを込めてつけられた名前なのだという。

永は優れていたから一日も長く使えるようにとの思いでつけられた名。

同じ意味を持ちながら、込められた想いは天地ほども違う。

永が思ったのはそんなことだった。

「うれしいわ。なんだか縁があるみたいね、わたし達」

久遠が屈託無く笑うので、永は何も言わなかった。久遠の機嫌がよければすべてよし。

窓を開け放った室内に心地よい風が入る。麗春の手作りだという焼き菓子と小人の形をした魔法生物が淹れたお茶のにおいが漂っていた。

「お茶にしましょう。姉さまがお菓子を作ってくれたの」

そこで二人でお茶にした。

久遠はいつもの魔法生物の上に座っていた。永は椅子に座り焼き菓子をかじりながら茶を飲んだ。

「姉さまのお菓子はおいしいでしょう？　姉さまは綺麗だし、頭もいいし、優しく、お料理も上手で、素敵なお姉さまの妹として生まれて嬉しいわ」

久遠は麗春が好きだ。麗春も久遠にはかなり甘い。姉妹の仲は良好だ。

麗春が才色兼備なのは本当のことなのであえて異論はない。

久遠のかりそめの恋人になってから気づいたのだが、どうやら自分分は口下手らしい。だから久遠が一方的にはなす。

久遠は様々なことを語る。時に他愛の無い景色や天気のこと。創りかけの魔法生物のこと。魔法の研究についてのこと。

久遠のおしゃべりに耳を傾け、茶を飲む。なんとも穏やかな時間だ。そんな時間が嫌いではないらしい。安らぐとはこういう心持なのだろう。

「永、わたしずっと こうしてきたいの」

久遠は賢いので 自分が長くないことを知っていた。

だからそれは願い。そして渴望。

明日も生きていくこと。

明日も共にあること。

その応えはひとつしかもっていなかった。

「私もです。久遠」

二人でかわした約束と願い

ささやかな約束（後書き）

短いです。

流浪

「このたびは多額のお布施をいただき、感謝しております」

通信機の向こうのフランチスが傲慢な表情を浮かべたまま言つと、紅蓮は愛想全開の笑顔で答えた。

「いえいえ、当然のことをしたまです。我々カトラス商会は常にオードウグ教会との関係を良好に保ちたいと思っております。今回のことはその表れだと思つてくださればさいわいです」

カトラス商会はつい先日オードウグ教会に多額の寄付をした。もらったものとして黙つておくことができないほどの額であり、枢機卿直々に感謝の意を表すために通信を介してのことではあるが、代表と顔をあわせた。

「ときに、つい先日加羅伊が天災に見舞われたおりには多大なる援助をなされたとか。我がカトラス商会の加羅伊支部はあいにく二度目の天災のおり支部長が巻き込まれ、身動きが取れませんでした。感謝いたします」

「神に仕えるものとして当然のことをしたまです」

フランチス枢機卿は傲然と答えた。

「それにしても、短期間に二度も局地的な災害に見舞われるとは、加羅伊は疫病神にとり憑かれてもしたのでしょうか？」

枢機卿の顔がわずかに変化した。

加羅伊を襲つた天災とは永と爆裂宣教師ことランバトルの戦いであり、疫病神とは個人を指す。

「ほかに飛び火しないか我らカトラス商会は案じております」

支部長の香昌が独断でオードウグ教の人間を拉致監禁した。下手をすればカトラス商会は教団の敵として認知されかねない。ランバトルを初めとする神威代理執行局に暴れられたら被害は避けられない。商売もできるものではない。死活問題だ。紅蓮はそれを回避するべく多額の寄付をしたのだ。

爆裂宣教師には交渉はできなくとも、その上司なら多少の交渉できる余地はある。

「心配ないでしょう。汝らには神の御加護があります」

つまりは多額の寄付に免じて今回は許してやるう、という意味だ。「それを聞いて安心いたしました。名残惜しくはありますが、予定がありますのでこれで失礼します」

「汝らに神の加護を」

枢機卿がオードウグ教の祈りを捧げた。

通信が切れると紅蓮は息を吐いた。

「なんとかなったようですね」

そばにいた秘書官が不快そうに囁いた。

「よろしいのですか？ あんな大金を」

カトラス商会は吝嗇ではないが、浪費家の集まりでもない。今回紅蓮がばら撒いた金は内部の人間からしてみても多すぎはしないかと眉を寄せるようなものだった。

しかし紅蓮の見解は違う。

「かまいませんよ。香昌さんの私財ですし、元はといえばカトラス商会のものです。返してもらって有効に使ったまでのこと」

オードウグ教へのお布施を用意するに当たって、紅蓮は騒動で命を落とした香昌の私財を没収し、それをまわした。もちろん魔道師ギルドの方にも金をばら撒いた。香昌の不手際のツケは本人に贖わせるべきだし、大半は横領によって肥やされた私腹である。ひとかけらの同情の余地もない。

爆裂宣教師の脅威を身をもって知る紅蓮には、神威代理執行局と真正面からことを構える気はない。そんなことをするのは自殺志願者だけであろう。金銭で回避されるなら万々歳である。

魔法義肢の暗殺者といい、爆裂宣教師といい、アレはもう同じ人間ではない（断言）。化け物と喧嘩する気はないのである。

「今回も逃がしてしまいましたね」

加羅伊での戦闘から五日がすぎていた。支部は壊滅状態である。

生き残った人員だけでの建て直しは不可能だった。采賀からまわした人員で支部は少しずつ建て直されている。新しい支部長を任命し、機能が回復したら紅蓮は加羅伊を出るつもりだ。

地図を見ながら紅蓮は考え込んだ。

「さて、次はどこに現れますかね？」

脳裏に浮かぶのは秀麗な魔法義肢の暗殺者の顔だ。

カトラス商会はまだあきらめていなかった。

並の人間ならば到底踏み込まない深い森。空に向かって伸ばした枝に陽がさえぎられ昼なお暗い。そんなところは野生の生き物の天国である。獣達が鳴きかわす。その中を行く人影はふいに足をとめた。

「あゝあ、見つかったやつたか。ていうかさ、なんでよりによって俺の探しにきたところにいるかな？ 出会わなきゃ、お互い無傷ですんだのに」

蹄が藪から現れた。足をとめただけで気取られたと判断したらしい。いい判断だと永は心の中で思った。

「いまアレはできないらしいね。一度なつてから元に戻ると数日間使用不可だそう。だからさ、好機だから探せって言われたわけよ。いくつかルートは考えられたのに、よりによって俺の選んだやつに隠れてたわけね」

永の完全武装は生身の部分への負担が大きい。とくに元の形に戻るときの激痛は普通なら耐えられないだろう。動けるようになるまで隠れていたのだ。永といえど短期間に何度もできない。しばらくは実力勝負するしかない。

それを知る麗春が差し向けたのだろう。

「俺はさ、旦那のこと、嫌いじゃないよ。俺らって、同じものだったじゃん。旦那は“裁”に生まれてきたときに。俺はさ、暴れ馬の蹄にかかった身寄りのない妊婦が死の間際に産み落とした子供なんよ。それで引き取って育てたのが“紡”だったわけよ、その時から、

俺らの運命って決まったようなもんじゃん。いつか任務に失敗して死ぬか、雇い主をかばって死ぬか、どっちみち使い捨ての道具さね」
蹄は世間話をするような気軽さで話しつつ、天使の微笑みを浮かべる。

永は黙って聞いていた。

「でもまあ、あのお嬢さんのためだったら、いいかなーって、思うわけよ。どっかの皮と骨ばっかの因業ジジイとか、脂ぎった中年オヤジのためよりかナンボか命の捨て甲斐があるじゃない？ どーせ俺が死んでも、お嬢さんは涙ひとつこぼさないと思うけど。そう思える依頼人って少ないわけよ。旦那も久遠ちゃんのためだったら死んでもいいって、自分で決めたんでしょ？ ……ああ、違うか。死なないって決めたんだ。でもまあ、俺の云いたい事は、分かるよね？」

永は頷いた。ある意味、自分と蹄が同類であることは既に分かっていた。そして、自分が久遠とともに在ると決めたのと同じように、麗春に力を貸すことを決めたのだということも。

だから 妥協はありえない。

「話は終わりか？」

「ああ、悪いね。これで終わりさ、どっちにしろ」

蹄は微笑んだままだった。

永は長剣の柄に手をかけた。

鳥や獣たちが一斉に絶叫のような泣き声を立てて逃げ出す。

かたや目に見えぬ無数の刃を操るもの、かたやその刃を撃墜する技量の持ち主、いかなる決着がつくものか。目に見えぬ必殺の鋼糸が音もたてずに永に殺到し 永の足が地をける

そして 勝負はついた。

周りの枝や木々が切断され音をたてて落ちた。二人の間合いはなく、二つの人影は重なっていた。永の顔や腕、足に朱線が走り 淡い魔法光がともし傷もろとも消えた。

「旦那……」

蹄が血を吐き、信じられないものを見るように自らの腹を貫く長剣を見下ろした。永が顔を上げて蹄と視線を合わせる。

「おまえは知らなかった。私は知っていた。それだけだ」

蹄の操る十本の鋼糸を弾き、絡めとり、あるいはわずかに軌道を変えさせたのは同種の武器だった。

鋼糸を操るのは？ 紡？ だけではない。蹄にはおよばないとはいえ永にもそれはできる。完全に防ぐのは無理でも切断にいたらなければ動きを止められることはない。

永は蹄の武器を知っていた。

蹄は永がそれを使えることを知らなかった。

その差が蹄の腹を貫いた長剣となった。

「……ま、しゃあねえか」

永が柄から手を放すと蹄はそのまま倒れた。じわじわと血が地面に広がっていく。

永は踵をかえした。

「と……どめは……ささな……いのか」

「……致命傷だ、必要ない」

蹄の腕を考えたら確実に息の根をとめておくべきだろう。万が一助かれればまた目の前に立ちふさがれることは間違いない。だが 永はそうしたくなかった。

「じゃあな、旦那……捕まるなよ」

かすかに微笑み蹄が眼をとじる。

一度だけかすかに頷き永はその場を立ち去った。

永の旅はまだ終わらない。

道化のつぶやき

水面が光を弾き輝いている。

流れる水は形を持たずただ流れていく。どのような形でもそこに必ず水は存在する。形はなくとも船を支え、時に全てを押し流す大きな力を持っている。

「ふむ……」

波が弾く光を見ながら蹄は己の腹部をさすった。

長剣に貫かれたはずのそこには　もはや傷すらない。

「浸透型魔法義肢ねえ……あんたの妹はとんでもないもん作ったもんだ」

もはや義肢とは言うべきではないと蹄は思う。数多くの小さなそれが人の体に潜み、なにかあれば肉体を補い再生させるといふのだ。「久遠の遺品から再現されたものだ。魔法義肢を使える体質だったことを幸運と思うのだな。検査している暇などなかったからとにかく押し込んだのだ」

ギルドに運び込まれ、たまたま麗春が所持していたそれを使ってみたのだという。

久遠は自分を徹底的に改造するに当たって新技術をいくつか作り出していた。久遠が残した資料からそれを作り出す研究が行われているという。

「んで、わざわざ俺の命を拾ったわけは？」

「お前はわたしの手駒だ。貴重な駒を捨てるわけないだろう」

麗春のこたえに蹄は肩を落とした。

「……またあの化け物どもの相手しろって？　勘弁してくんない？　この浸透型とやらは体を補うだけで強化とかしてくれるわけじゃないだろ？　俺は魔法義肢で補われているとはいえ、それ以外はまっさらの普通の人間だよ？」

戦闘型魔法義肢で固めた無音の暗殺者と、魔法薬で肉体強化した

聖なる鎧の爆裂宣教師。荷の重い相手だ。

「安心しろ。きさまの戦闘力は立派に化け物だ」

「……おじよおさぁん……」

「とはいえ、しばらく情報待ちだ。次の街まで船旅でも楽しむんだな」

「へいへい」

蹄はデッキに寝転びながら後に流れていく川岸の風景を楽しんだ。永が見つからないことを祈りながら。

道化のつぶやき(後書き)

実は生きてました。

空虚なる

いくつもの魔法光を発する明かりを束ねたきらびやかな照明。ゆつくりとワルツが流れ、着飾った男女がくるくると踊る。貴婦人の胸元や髪を美しく飾り立てる宝石が光を弾く。

香り豊かなワインに料理人の矜持をかけたご馳走がテーブルに並び、きらめくグラスを運ぶ給仕があたりをゆつくりと回り酒杯を配る。

そこここで交わされる談笑。社交辞令と腹の探り合い。

どうにも苦手な世界だと羽扇の下で麗春は溜息をついた。

「こういう場は苦手かな？」

白髪の知性がにじみ出る老紳士が尋ねた。

「ええ、わたしには過ぎた場所ですわ」

「そうかね。わしは君のような美人を同伴できて鼻が高いがな」

鬘を足されて高く結び上げられた髪に失礼にならない程度の飾りをつけ、浮かぬ程度に抑えられたドレスでも、凜とした雰囲気とにじみ出る知性で麗春は輝いていた。

「お戯れを」

魔道師ギルドでも憚らなければならぬ相手というものがある。

有力な相手にはそれなりの礼儀が必要なのだ。

シエンタ王国はいくつかの問題を抱えたまままだとはいえ代替わりした。ギルドとしては誼を通じておかなければならない。その主催する祝宴に招待状をもらえば、最高責任者が顔を出す。

それはいいのだが、たまたまそのあたりに来ていた麗春をパートナーとして同伴させるのは横暴だと麗春は思う。

この場には会いたくもない相手がきている。

かなり久しぶりにフランチス枢機卿の顔を生で見た。あちらも気がついてこちらとは関わらないようにしている。

それが懸命だと麗春は思うのだが

「これはこれは、柳桜どの。お久しぶりですな。これは、これほど若く美しいご婦人を連れてくるとはまだまだ隅に置けませぬなあ」
「おう、これはカトラス商会の白良どの。ご無沙汰でしたな。彼女は我が誇る才媛ですぞ」

「お初にお目にかかります。麗春と申します」

麗春は紅蓮の祖父に社交辞令の挨拶をした。

「ほほう。あなたが麗春どのか。いや、これは美しい。孫から聞いてはおりましたが、これほどは。あれが執着するのもおどおり。わしも後二十ばかり若ければ」

「お戯れを」

執着しているのはわたしではなく妹にだろう、と心のうちで呟いて笑顔の仮面をかぶる。まともに相手をしては自分がばかを見ると麗春は知っている。

ギルドマスター柳桜とカトラス商会の大物白良の会話をさりげなく盗み聞きながら麗春はにこやかに慎ましい淑女を演じていた。

恐ろしいことに、この場には永を追わせている三巨頭がそろっている。もし永がそれを抹殺するため動き出したらそれを阻止できるか？ 少し考えて麗春はぞっとした。

暗殺者^{あれ}は音を立てない。いつの間にかどこにでも滑り込む。気配も感じさせず、目的を達成すれば闇に消える

この王宮の警備ぐらいではどうにもならないだろう。

人を使う立場にある彼らは簡単に命をつもつとするが、それは相手を敵に回すということ、自分自身にも牙が向けられることを自覚しているのだろうか？

「どうしたね、麗春くん」

「いえ、少し人いきれが……」

「おお、賑やかですからな。いや、ここまでの宴を主催するとは思いつつたことを」

「わしには理解できんがな。問題を先送りにしたまま、なかったことのように扱うとは。それで解決できるとおもっているのかな？」

シエンタ王国の代替わりは様々な問題があった。

次の王と目されていたのは前王の長子である。長く皇太子にあつた王子が継ぐものと誰もが思っていた。

ところが前王が突如皇太子の継承権を剥奪、北の塔に生涯の幽閉を言い渡し、甥に王位を譲り退位した。

この突然の政変に誰もが驚いたが、そこは組織の長、真実を探り出している。

元皇太子　前王の長男は焦りすぎたのだ。このままならいつか王はその座を息子に譲り渡しただろうに、王位欲しさに王に遅効性の毒を少しずつ盛つたのだ。これはすぐに知られた。

前王は息子の継承権を剥奪したものの　子が親を毒殺しようとしたという醜聞を嫌い　処刑せず塔に生涯幽閉することにした。毒に犯された体は治るかどうか分からず、次の王位継承者に王位を任せ、治療に専念するため退位したのだ。

生ぬるいと組織の長達は思うのだ。禍根を断たずして治世の安定はありえない。さつさと元皇太子を始末してしまえばいい。食事の全てに毒を仕込めば、いずれ死ぬ。毒を食わずとも食べなければ人は死ぬ。

自業自得。それで全てはかたがつく。

「元皇太子派はどうですか？」

「当てが外れた負け犬どもがたいしてことができるとは思えません
がね」

「……血迷うこともありますわ」

「おお、そうでしたな。窮鼠猫を噛むという諺もありますし、用心しておきましょうか」

ホールのドアが乱暴に開けられた。

音に驚いて振り向く貴人達の前に武装した兵士が次々と現れ、乱暴にホールを取り巻いていく。

甲高い淑女の悲鳴。

ヒステリックな誰何と怒号。

なにが起きたものかと慌てふためく人々の中で新王が叫んだ。

「何事か！ 侯爵、これはどういうことか！」

乱入してきた兵士達の中からきらびやかな装束をまとった壮年の男が進み出る。

「これはこれは偽王。このたび就任真に残念でございます。我々はこの尊き位にあるべき方についていただきたく行動を起こしたしいです」

白良どの、あなたの用心は遅すぎたようですよ。麗春は心の中で呟いた。

空虚なる(後書き)

後三話ぐらいで終わる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4045v/>

久遠のかなたに

2011年9月29日03時26分発行